人文会ニュース

2007.12

巻頭エッセー　「人文」ということ …… 樋口陽一　1

書店現場から　棚と対峙する日々 …… 市岡陽子　3

現代リベラリズムとは何であったか …… 盛山和夫　5

「無料貸本屋」から「情報の町医者」へ …… 豊田高広　17

東京国際ブックフェアの変遷と展望 …… 星野　渉　23

代表幹事あいさつ

委員会活動方針

2007年特約店グループ訪問報告

102

巨大建築という欲望
権力者と建築家の20世紀

D.スジック／五十嵐太郎監修、東郷えりか訳　ナチスドイツから9.11まで——建築と政治をめぐる人間模様、知られざるもうひとつの歴史を活写。　◆3990円

生きる力
〈いのちの柱〉を取り戻せ

丸橋賢　歯育・食育こそが元気の源に!! 〈いのちの柱＝歯〉のゆがみが体と心のひずみをもたらす。無気力・アレルギーを吹き飛ばす「健康生活の四原則」◆1680円

はじまりの物語
デザインの視線

松田行正　デザイナーの発想はどこから湧いてくるのか？ 発想のルーツを求め、イメージの源泉を訪ねる。デザインソースの万華鏡、図版480点収録。　◆2940円

紀伊國屋書店
出版部：東京都渋谷区東3-13-11
営業 TEL044 (874) 9657　表示価は税込み
http://www.kinokuniya.co.jp

小川政亮著作集
[編集委員] 井上英夫編集代表 ほか14名　全8巻

A5判・セット価格37800円

①人権としての社会保障
②社会保障法の史的展開
③社会保障の権利と組織・財政
④家族・子どもと社会保障
⑤障害者・患者・高齢者の人として生きる権利
⑥戦後の貧困層と公的扶助の権利
⑦社会保障権と裁判
⑧社会保障と平和・国籍・被爆者

現代日本を代表する詩人による戦争論

言葉と戦争
藤井貞和著　◆2625円

詩人で物語研究の第一人者である著者が、戦争の起源からテロリズムまでを論じ、「言葉は戦争に向き合えるのか」という問いを徹底的に思考する。

大月書店 東京都文京区本郷2-11-9
電話03(3813)4651〈代表〉
http://www.otsukishoten.co.jp/（税込）

良知力追悼論集
思想史と社会史の弁証法
編者　川越修・植村邦彦・野村真理——菊判・四七〇頁・七九八〇円

平子友長・神田順司・松岡晋・篠原敏昭・植村邦彦・川名隆史・野村真理・川越修・執筆。研究の歩みを辿る、良知力コレクション自録（横浜市立大学・慶應義塾大学所蔵品）の解説つき。

◎米国ポストモダン派マルクス経済学者らによる論集
経済学と知
——ポスト／モダン・合理性・フェミニズム・贈与
カレンバーグ＆アマリーリオ・ルッチオ編著　長原豊訳——菊判・五二〇ページ・八四〇〇円

◎公共の地平を開く、権威への不服従とは
異議申し立てとしての文学
——モーリス・ブランショにおける孤独・友愛・共同性
西山雄二著——A5判・四〇〇頁・六五〇円

御茶の水書房
〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20
TEL 03-5684-0751 FAX 03-5684-0753（価格は全て税込み）

慶應義塾大学出版会
http://www.keio-up.co.jp

フーコーの後で
統治性・セキュリティ・闘争

芹沢一也・高桑和巳編著　七〇年代後半のフーコーを8人の気鋭が読み、使いまわし、今日の問題系に立ち向かう。　●2100円

失われた民主主義
メンバーシップからマネージメントへ

シーダ・スコッチポル著／河田潤一訳
19世紀の草の根民主主義興隆から9・11以降の米国市民の歴史を克明に描き、エリートに管理される現代社会を問う。　●2940円

〈私たち〉の場所
消費社会から市民社会をとりもどす

ベンジャミン・バーバー著／山口晃訳
代議制民主主義の陥穽に対して、「仕事〈後〉」の世界からの解決を提案した、刺激的な民主主義論。　●2625円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30【価格税込】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

〈巻頭エッセー〉

「人文」ということ

樋口　陽一

研究室から研究室へと何度か引越しを重ね、その間、多くの本や雑誌を他人にあげたり大学に引きとってもらったが、まだ手放し兼ねているのもある。その中に、表紙も中身の紙もすっかり赤茶けた薄い冊子がひとつある。『国家権力の諸段階――一九五〇年度歴史學研究會大會報告』で、奥付を見ると一九五二年第四刷発行となっている。

この本には思い出がある。高校（新制）三年の日本史の授業は、受験向きの概論でなかった。たとえば土一揆について黒板いっぱいを縦横に使いながら、大学を出て自分の母校に着任してまだ数年という若い先生（やがてその校長先生になり、県教育長になる）が熱弁をふるう。「歴史は暗記もの」という先入感を微塵に粉砕する授業だった。その授業でリポートを課され、大学近くの本屋にゆけばなにか種本になるのがあるだろうという程度の気持で、出会ったのが当の本だったのである。ところどころに赤エンピツで線を引いた跡があって、適当にひき写していい加減な感想をつけ加えてお茶を濁したことを、ぼんやりと思い出す。

何十年ぶりに手にとってページをめくってゆくと、まだ理系にゆくはずだったそのころは考えもしなかったことだが、縁あって親しく接することとなる先学の名前がある。何よりまず高橋幸八郎先生であり、フランスをいわば座標の原点に置いて比較憲法学を中心とした仕事をするようになってゆく私にとって、別格の重みを持つ存在となった。先生との最初（一九五九年）の直接の出会いはフランス政府給費留学生選考の口述試問委員と受験生という立場でのことだったが、その後、パリや仙台や東京の旗亭で、酒杯を間に何度、あの魅力的な語り口に接する幸運を得たことか。おこがましくも、専門ちがいにかかわらず『社会経済史学』（五〇巻一号）の求めのままに、先生の遺著 *Du féodalisme au capitalisme, problèmes de la transition* (Paris, 1982) について、書評欄を汚したこともある。

もうお一人は、藤間生大さんである。その出会いは、去年の夏、まったく意外なきっかけからやって来た。私と三〇歳以上も年のちがう若い友人が、信濃追分に滞在していた私に、いま北軽井沢で藤間さんが執筆されているからご都合を伺ってみようか、と言ってくれたのである。何しろ日本史の授業で、石母田正や藤間生大の名前は、なんの予備知識もなかった少年の耳に、強烈な印象を残していたのだから、大よろこびでその機会をとらえたのはいうまでもない。九〇歳代半ばにさしかかろうというご年齢からは想像もつかぬほど背筋を伸ばし、ケーテ・コルヴィツと樋口一葉についての原稿をパソコンに入力なさっていた。お仕事の時間に割り込んだ初対面の訪問者に、細部をゆるがせにしない明晰な質問を連発して下さったことは、印象深かった。

☆　☆

法制・理財の学に携わるものにとって、「人文」との間には距離がある。そんなことを思いながら書棚を眺めていて、半世紀以上前に出会って、自己流に「使った」本のひとつに目がとまったわけだった。「人文」へのなにがしかの憧憬がなくては、社会科学も自然科学もつまらぬものになろう。

ここで連想は、自然科学と文学の間、西洋・東洋と日本の間を華麗かつ地味に往還しつづけた、木下杢太郎＝太田正雄に及ぶ。彼は、かつての日本が東洋を仏教、儒教など精神面から受け入れたのに対し、西洋の受容は機械や制度から始まったこと、ヨーロッパといってもチュートン系の自然科学的文明を重んじて、ギリシャ・ラテンの学芸を疎んずる傾きがあったことの問題性に、強く気づいていた。「目前のエフィシェンシイを害ふものをば捨てて、早く実利に就かうといふ、日本民衆の現代精神が、物の淵源に遡つて研究するなどと云ふ迂遠を嗤はせ」たのだと戒しめした彼が、その八十二年後の「現代精神」を垣間見たら、絶句するほかないのではなかろうか。

「現代精神」の進行それ自体は不可逆なのかもしれない。だが、それを遅らせることはできるだろう。「変だ」「おかしい」と思うのを忘れないことが、ものの始まりではないか。はなしの文脈はちがうが、中野重治の一句を記憶から呼びさますのは無駄でなかろう。――「事がうまく運ばぬからといって決して腰をひくな。どこまでも、自尊心を謙遜に保って、筧の水のようにしたたりを溜めて行け……」。

そう、「人文会」こそ、その「筧のしたたり」を溜めつづけるのだ。

（憲法研究者）

書店現場から

棚と対峙する日々

市岡　陽子

当店はイオン倉敷ショッピングセンター内にある約五七〇坪の店である。イオンには、「お客様の声」を投書できるポストがあり、わが書店にも声が届くことがある。人文書の担当になりしばらくして、「専門書のコーナーで、入門の本と難解な本はよく揃っていると思いますが、その中間に当たる本が少ないように思います。」との女性の意見が届いた。お叱りのものが多い「お客様の声」の中で、それは予想に反して、「これからも利用させてもらいます。頑張って下さい。」と好意的に締め括られていた。それだけに、非常に難しい問題を提起されたように思ったのである。この投書には、どのジャンルについてであるかは、触れていなかった。それでも私は、真っ先に人文書のことかなと直感的に思ったことを覚えている。仮に、心理の棚では中間の本はどんなだろう、心理学一般なら、有斐閣アルマや新曜社の心理学エレメンタルズのシリーズなどだろうか、いや他にも必備本があるのだろうか、と考えあぐね、他の書店を巡ったりもしたが、結局「中間の本」に対する答えは出なかった。それ以後、この投書は私の頭を離れることはない。

しかし、まだお客様の思いを教えてもらえるのは幸せなことである。人文書を訪れる多くのお客様は「物言わぬ客」が殆どである。さらに、担当者よりお客様の方が断然、本の内容については詳しい。その分野を生業としている方、または趣味で究めておられる方も、はるかによくご存知である。そんななかで担当者が太刀打ちできるのは、毎日新刊や補充する本をいち早く手に取ることができる特権を生かして、本の場所をきちんと明示することに尽きると思う。

例えば、『世界屠畜紀行』（解放出版社）は、どの棚がいいのかと考える。版元を見ると、人権や社会問題の棚に多いが、内澤旬子さんのファンはまず来ないだろう。現に「情熱大陸」を見て知った若いお客様を案内したが「こんなところに！」と言われたことがある。結局、人権の棚と食文化の棚に面陳したが、果たしてベストであったのか、聞くこともなく帰ってしまわれたり、手に取って頂く機会を失わせたような気がしてならない。

また、棚を決め、その一冊を差し入れる時、隣との関係も重要である。先程の投書然り、難易度の序列もある。様々な考えのものを分け隔てなく置くという公平な視点も持っていたいと思うが、相反する意見のものを隣に置くわけにはいかない。持ち得る全ての知識（時には当て推量に）を総動員して、ご近所付き合いがうまくいく並びにしていく。

あるいは、他のジャンルの棚も見てみる。現在、ワーキングプアや格差社会、ニートといったタイトルがビジネス書にも並んでいる。食育の本は、教育にも保育にも食品学の棚にも、実用書にも見られる。勿論、それぞれの担当者が対象となるお客様を想定してできる限りの陳列を模索している。しかし、本当に「物言わぬ客」に対して、親切に本の場所を明示できている棚になっているのだろうか。お客様が除々に離れていってしまうような不安に駆られることがある。

このようなことを悶々としている時に、今年も四六判フェアの季節がやってきた。二〇〇〇年から始めているとのことなので、奇しくも私の書店員歴と同じである。今年の選書を見ていると、例年以上に多岐にわたり、四六判ということ以外に共通性がないといってもいい。他のジャンルも観察していると自負していたにも関わらず、人文書という一担当に捉われ過ぎていたのではないか、書店の恣意的なジャンル分けや、担当者の独りよがりになっていないか、四六判フェアを並べながら、もう一度固定観念を捨てて考え直さなければいけないと思う瞬間があった。人文会でも新ジャンルの分類の見直しをされていると聞く。時代はどんどん変容し、全ての出来事は過去になっていく。言葉で表せないものが沢山ある中で、何とか分類を作っていこうとする姿勢の前に立ちはだかる壁は高い。それだけに人文書は、見せ方並べ方に大きな可能性を秘めているように思う。

人文書の担当になり三年半が経った。担当を持って三年目くらいからようやく思うような棚ができるようになると言われたことがあるが、三年以上さわっていても基本さえできていないような棚もある。私の上達が遅いこともあるが、人文書という汲めども尽きぬ泉のような本の群れを前に、無力さを感じている書店員の方はきっと他にもおられると思う。そのことを真摯に受けとめて、一冊ずつ丁寧に扱える担当者でありたいと、今回寄稿させて頂いたことを感謝して、記しておきたいと思う。

（いちおか　ようこ・喜久屋書店倉敷店）

筆者近影

現代リベラリズムとは何であったか

盛山　和夫

一

今になって思えば、現代リベラリズム（従来のリベラリズムとは似て非なるもの。グレイのように区別しない論者もいるので注意が必要）は形を変えたポスト・モダンの現代思想であったようだ。むろん一方の旗手ロールズやドゥオーキンと他方のフーコーやデリダとは、基盤や背景になっている思想の系譜も明示的に語られている議論の中身も大きく異なる。何よりも文体に現れている思想の気分とでもいうべきものがまったく異質だ。両者は、ほとんどお互いを参照することなく独立に別々の思想空間で発生し展開してきたものである。しかし、両者がそれぞれ格闘した空間の位相構造はおそろしく類似している。フランス系現代思想が闘い、そこから脱出をはかったのは、マルクス主義という正統思想が高度産業社会の到来と構造主義とによって失脚させられた大空位状況である。それはリオタールの「大きな物語」の比喩が何よりも雄弁に明らかにしている。「知の考古学」とか「脱構築」とか、あるいは「シミュラークル」とか「逃走」とか「戯れ」とか、一見すると相対主義的で懐疑主義的な装いを示しながら、実のところ、亡命していた正統王朝を密かに復位させることが、その闘いの目標であった。

アメリカの現代リベラリズムにとっては、ローティの言う「改良左翼」の退位によって生じた思想空間の空位が問題であった。改良左翼とは、独立宣言、リンカーン、ウィルソン、ニューディールを経て公民権運動に至るアメリカ政治史の「大きな物語」をもとにして、アメリカという「選ばれた国」が人類全体にとって果たすべき使

命への信仰から成り立ってきたものだ。それが、ベトナム戦争と学生叛乱とによって瓦解してしまった。見失われたアメリカの使命の再建、それが現代リベラリズムが達成をめざした課題であったと言えるだろう。

それぞれ、「大きな物語の崩壊」がこの二つの現代思想にとって共通の問題状況なのだが、それは同時に「多元主義」という社会的世界の現実に立ち向かわなければならないという課題の共通性でもあった。レヴィ＝ストロースはあからさまにフランス正統派の西洋中心主義を攻撃していたし、アメリカにはもっとハッキリした現実の政治レベルで多元主義の挑戦が存在していた。

この多元主義への応答のしかたは、両大陸の現代思想の間で異なっているかのように見える。知の考古学や脱構築は相対主義的で、「正義」という一元的価値を奉じる現代リベラリズムとは明白に対立するスタンスを取っているように思われるかも知れない。しかし、フーコーにおける「身体」の表象（拙著『権力』参照）やデリダにおける「脱構築不可能なものとしての正義」の観念に明らかなように、フランス現代思想は「究極的な価値源泉」への絶対的信仰によって支えられている。それは単に、現代リベラリズムの「正義」ほどには前面に提示されて主題的に論じられることがないだけだ。

さて、J・ロールズが一九七一年に『正義論』を著したとき、上に述べたような状況がすべて彼の視野に入っていたわけではないだろう。しかし現代リベラリズムの幕開けを告げるその書は、ロールズの意図とは異なる読まれ方をした。ロールズ自身の書き方にも原因があるので、誤読というべきかどうかは微妙だが、少なくとも次の4点は指摘できる。㈠原初状態の設定についての契約論的見解、㈡内省的均衡の位置づけ、㈢格差原理の解釈、㈣「正義」の概念の理論上の意義、である。分かりやすく言えば、極端にカント主義的に解釈されたロールズ像が当初から通説として確立してしまったのである。

『正義論』の（見かけ上の）カント主義ないし契約論は、ベトナム戦争と学生叛乱によってアメリカ社会の道徳的アイデンティティの危機を感じていた人々にとって、「社会の道徳性」を再建するための極めて魅力的な理論的企てであるように思われた。実際、「正義は社会制度の第一の徳目である」という書き出しの文章から分かるように、この点はロールズ自身に自覚されていたことであった。

「社会の道徳性」という主題が理論的に明確に提示されたのは、これが最初だと言っていいかもしれない。むろん、それ自体は人間の知的活動が始まって以来、いつ

何処でも問われてきたことであるし、とりわけホッブズ以降の近代社会思想の実質的な主題であり、啓蒙思想も功利主義も、いわんや社会主義もマルクス主義も、それを論じてきたものである。けれども、それらが払拭できなかった「自然主義的」で「還元論的」とでもいうべき思考パターンのために、「社会の道徳性」は何かより根源的な客観的真理によって導出されたり説明されたりすることができるものだと見なされていた。このことは、「社会の道徳性」を主題とする学問に固有の名称が確立していないことからも明らかだ。（日本語では「公共哲学」がそれをめざしているが、英語圏でPublic Philosophyの語は確立していないし、それに対応する学会組織は日本も含めて存在しない。）

ついでに述べておくと、コント以来の社会学の主題は、本来的にはまさに「社会の道徳性」であった。それは、（ヴェーバーは価値自由をかかげて方法論的に禁欲したので目立たないが、）ジンメル、デュルケム、サムナー、クーリー、シカゴ学派、パーソンズを経て、今日のいわゆるコミュニタリアン派のベラー、エチオーニ、セルズニックなどの仕事から明らかだといえる。ただし、社会学もまた自然主義的思考から脱却することに失敗してきたし、経験科学としての純粋化をめざしたため、今日の社会学徒の多くはこの主題を忘れているか回避している。

さて、契約論的に見える原初状態の設定と「正義」概念を前面に押し出して、「社会の道徳性」を主題として提示した点において、ロールズ『正義論』は紛れもなく革新的であった。自然主義的ではない形で社会の自立した特性として社会の道徳性を定式化しようとしたロールズは、それを「自由で平等な諸個人が自発的にアソシエーションとしての社会的協働のしくみに参加するための公正な規範的な諸条件が確立していること」と概念化し、その諸条件をまとめたものを「正義の諸原理」と名付けたのである。ロック的ないしアメリカ独立宣言的な構図が見え隠れはするものの、この定式化は極めて独創的な着想だといえる。自発的に形成される社会的協働のしくみとしての社会が従うべき規範的原理の中身が「正義」である。これが「公正としての正義」と呼ばれるゆえんである。

ここにおいて、「正義」が社会の道徳性にとっての最高位の価値を表すものとして定位されていることが注目される。「正義Justice」という概念にそうした理論上の位置づけが与えられたのは、これが初めてである。ここから、現代リベラリズムを中心とする、社会の道徳性を主題とするロールズ以降の諸探究は、その主題をいちい

ち「社会の道徳性」などという迂遠の言葉づかいではなく、端的に「正義」という主題を掲げるようになった。むろんこれによって、「正義」概念には微妙な変質が生じたし、何よりもある種の絶対性が付着するとともに、理論構成のあり方を制約することになった。

いずれにしても、ロールズ『正義論』によってこそ、社会の道徳性を主題とするまったく新しい社会理論の学問潮流が出現したのであり、その中核になったのが現代リベラリズムである。その新しさはいくら強調してもしすぎることはないし、それは、アメリカの知識層にとっては、ベトナム戦争以降の失意を埋めて道徳的主体性を回復するための最も希望に満ちた理論プロジェクトだと受け止められたのだった。

二

現代リベラリズムの理論活動は「責任―平等主義」と「中立性原則」の二テーゼに焦点をおいて展開された。前者はいうまでもなくロールズの「格差原理」に端を発する平等主義を理論的に彫琢しようとする一連の試みである。後者はロールズ自身は曖昧な短い文章しか記していないが、ドゥオーキンとアッカーマンとによって表だって展開され、その後、リベラリズムの最も中核的なテーゼと見なされるに至ったものである。ドゥオーキンは両方について主導的な役割を果たしており、その意味では、道徳哲学者ロールズではなくて法哲学者ドゥオーキンこそが現代リベラリズムを代表する論者だといわなければならない。そして、このことが現代リベラリズムの方向性に大きく影響した。

ロールズ『正義論』への初期の論評は、原初状態の設定と並んで、格差原理に集中している。（渡辺（二〇〇〇）によって詳しい紹介がなされている。）格差原理は、その「正義の原理」の中の第二原理のさらにその一部をなすに過ぎないのだが、公民権運動、教育機会の平等、強制的バス通学、アファーマティブ・アクションなどを通じて、「平等」問題へ高い関心が寄せられていたためであろう。ただ、K・アローやJ・ハーサニのような錚々たる学者の論評であるにもかかわらず、その多くは格差原理の完全な誤解に基づいていた。アローは格差原理が資産の完全平等主義を意味していると受け取ったし、ハーサニは、財の追加的配分に当たっては常により貧しい者、より恵まれない境遇にいる者が優先されなければならないことを意味すると考えたのである。他の多くの論者は、彼らほど極端ではないが、格差原理は二つの社

会状態を比較評価する際、それぞれにおける最も利得の低い者のどちらが利得が高いかという基準を採用するものだというマクシミン解釈を受け入れた。日本でも、佐伯胖『「決め方」の論理』（一九八〇）や鈴村興太郎『経済計画理論』（一九八二）などの社会的選択理論のテキストを通じて、その解釈が一般化していった。

これらはいずれも、ロールズが考えていたよりも強い平等主義の解釈であるが、おそらく『正義論』はそう誤解されることで大きなインパクトをもったと言えるだろう。そのことは、無知のヴェールがかけられた原初状態における選択という設定が極めて印象深かったために、ロールズの理論的構成のしかたは契約論的なリーズニングに基づいているという誤解が広まったのと同様である。この点についても、ロールズが考えていたことおよび実際に用いたものは、もっと穏当なものであった。

なお、私からみて、ロールズが格差原理によっていかなる平等主義を意味していたかについての正しい解釈は、いち早くドゥオーキンの短い文章（一九七七の第五章）に示されているし、理論全体の非契約論的性格については、比較的早くにローティが気づいている。格差原理によってロールズが言わんとしたことは、せいぜいのところ「社会制度の公正なあり方は、他の誰の利益でもなく、まさに生まれや才能や資源において最も恵まれない境遇におかれた人々の利益に照準して、その利益が最大になるようにアレンジされたものだ」ということにある。それはある意味で、「公正なものと見なしうる不平等」の条件であり、それゆえにこそ「格差 difference」原理と名付けられたのだと見ることができる。ロールズにとっては、それが社会的協働への参加の公正な条件としての正義にかなったものであり、明らかに功利主義や完成主義とは異なる規範的主張なのであった。

いずれにしても、ロールズ『正義論』のインパクトはロールズの意図とは無関係に巨大な波となって広がっていく。アマルティア・センは「何の平等か？」という論文（一九八〇）において、人々の主観的効用に準拠する功利主義を「厚生主義」として批判する一方で、ロールズが外面的にのみ共通な尺度を持つ基本財での平等主義を考えている点を批判して、人々の「必要 needs」を考慮に入れた「潜在能力の平等」を主張したが、これは、平等主義理論は何の平等を主張すべきかという新しい探求テーマの地平を開くものであった。それを受けて、責任—平等主義への道をブルドーザーのごとき馬力で切り拓いていったのが、ドゥオーキンの「平等とは何か」（一九八一）と題する一連の論文であった。それは現在

『平等とは何か』（原題は『至高の徳』、二〇〇〇）という著作に書き直されて出版されている。ここでは基本的には市場主義的な「資源の平等」が謳われているのだが、同時に、センのニーズ論にならって、障害者への配慮をそこに織り込もうとする。そこで動員されるのが責任―平等主義の論理である。

「責任―平等主義」という言葉は私の意図的な誤訳で、英語では「Luck-Egalitarianism」、つまり「運―平等主義」である。簡単に言えば、個人に責任があって生じた不平等は仕方がないが、本人に責任のない不平等に対しては、社会が補償しなければならないという主張である。これによって、さまざまな境遇を仮想しながら責任や平等やあるべき補償などをめぐる一種の知的パズルを解く作業に、多くの論者が引き込まれていった。マルクス主義の陣営からも、従来の労働価値説に代わる新しい搾取概念の可能性を見出した論者たちが、分析的マルクス主義というラベルを付けて参入してきた。中でも、マルクス主義的数理経済学の泰斗、J・E・レーマーは『機会の平等』（一九九八、未邦訳）というあまり数学の難しくないコンパクトな書物を著している。

ただ、その後は責任―平等主義の倫理性について重大な疑念も提起されて、一時の熱い期待も萎んできたように思われる。

責任―平等主義には、現代リベラリズムの基礎づけ主義的特徴がよく現れている。それは、「責任のあるなし」という基底的な事実（と思えるもの）と「責任のある者が責務を負う」という自明な（と思われる）論理に訴えているのである。このように、現代リベラリズムは、普遍的に妥当するはずだと思われる根源的な規範的原理を探し当てて、そこから論理的に規範的命題を導き出そうとする理論戦略を極めて明示的に採用している。これは言うまでもなく、多元的な社会という現実を前にして、なんとか普遍的に妥当するような規範理論を構築しようとする企図にとって有効なものだと思われたからにほかならない。しかし実際には、「根源的に普遍的妥当性を持つ」などというものは存在しない。そのように想定されたものも、結局はそうではないことが判明していく。

必ずしも責任―平等主義の文脈にはとどまらないが、日本でも「責任」を根源的に位置づけることを通じて、規範的社会理論の革新を目指す試みが、瀧川（二〇〇三）や北田（二〇〇三）や成田（二〇〇四）などによって展開されており、そこでは、どういうときに誰に「責任」が生じるかについては何か客観的に決まっているはずだという想定のもとで、その「どういうときに誰にど

のような」責任が存在するのかについて探求されているのである。しかし、「責任」なるものは、「義務」や「権利」と同じく、社会的に構成されたものなので、この探求はむなしい。そして、責任―平等主義のプロジェクトの論理的基盤は崩壊せざるを得ないのである。

三

「中立性」原則もまた、現代リベラリズムの基礎づけ主義的性格を如実に示している。これはドゥオーキンの一九七八年という早い時期の論文で「善き生の問題と呼ばれることがらについて、政府は中立でなければならない」という形で提示され、その後、アッカーマンによってもやや異なる形で定式化されたものである。日本でも井上達夫（一九九九）が「正義の原理は「善き生」の特殊構想に依存することなく正当化可能でなければならない」という「正義の独立性」を掲げている。「善き生の特殊構想」というのは、人々の個別的な「生き方」や「アイデンティティ」や「信念」のことであり、「善き生の問題」というのは、それらが人々や集団の間で多元的に異なっているという問題状況のことである。他方、政治権力はそうした異なる善き生の構想を抱いている多様な人々に対して、共通にかつ強制的に働きかける。現代リベラリズムは、その際、政治権力の働きは「中立」でなければならないと主張するのである。これもまた、多元的な社会において異なる文化や生き方に対する「平等」の配慮をめざすことによって、普遍的に妥当する規範的原理であることを意図した主張内容になっている。

厳密に言えば、アッカーマンや井上は、政治権力の「正当化の理由」を問題にしているのであって、その働きやそれによってもたらされる帰結の中立性を主張しているのではない。この点は、リベラリズムの論者からしばしば強調される。実際、どんな政治権力も結果においてどれかの善き生の構想にとって有利に働き、他に対して不利になるというような事態を生じさせざるをえない。日本語が公文書や公教育での使用言語とされているところでは、日本語文化にとって有利で韓国語やポルトガル語の文化にとって不利であることは否めないし、政教分離の原則が国家宗教の樹立を望む宗教的信念にとって不利であることは明らかである。しかし、「正当化の理由」としての中立性は、そうしたことを正義にもとるとして非難するのではない。現代リベラリズムといえども、政治権力が結果において中立であることはいかなる社会においてもまず不可能だとは考えているのである。

しかし、このように「正当化の理由」に限定することで、「中立性」原則が維持できると考えるのは、あまりにも素朴すぎると言わざるをえない。なぜなら、そこでは「正当化が成功する」ことそのものの文化的拘束性というものが、まったく視野に入っていないからである。

ロールズを含めて、現代リベラリズムは規範的主張や規範的制度が「justifiable」であるか否かでもって、その妥当性の判断を与えようとする傾向がある。「正当化できる」ということは、「正当なものであることが論証できる」ということであり、「Aが論証できる」ということはすなわち「Aだ」と考えているのである。しかし、周知のように数学でさえ、定理の論証可能性は公理系の設定に依存している。ましてや、公理系に対応しうる共通の基盤を設定できるような状況から遙かに遠く隔たった地平にいる規範的社会理論の討議空間において、「正当化できる」とか「論証できる」というような概念に訴えても、何の意味もない。端的に、それは存在しないか、たとえ存在しても、そうだと同定できないような事態なのである。

逆に言えば、もしもかりに「正当化できる」という事態が事実上起こっているとしたら、それはあくまで「ある特定の文化的前提」のもとにおいてでしかない。それは、現代リベラリズムが想定している普遍的正当化とはほど遠い事態なのである。そして、現代リベラリズムが自らを「正当化できている」と思っているとしたら、それは、現代リベラリズムというある特定の文化的信念の内部での自己表象に過ぎない。今日において、「リベラリズム」系と目されるさまざまな政治的主張がしばしば「帝国主義」的に映り、実際そうであることが多いのは、そのためである。

拙著でも述べたことだが、「正義」とは現代リベラリズムの普遍の帝国が奉戴する唯一神の呼び名である。それは、帝国内の文化的多元性を超越して統合する至上の価値を表している。もっとも、ロールズ自身はこれほどの超越性を正義概念に付与するつもりはなかっただろう。しかしその『正義論』に触発されて展開されていった現代リベラリズムはロールズの意図を超えて、中身は何であれ、多元性を超越して普遍的に妥当する規範的価値の究極因としての「正義」を奉戴する宗教運動へと進化していったのである。

現代リベラリズムにおける基礎づけ主義的な理論構成の傾向は、リーズニングの仕方として司法モデルを採用していることにも根ざしている。司法というものは、提起された争点に対して「何が合法か」「どこに権利があ

るか」についての特定的な判断を下さなければならないが、その際、その判断を「正当化する理由」が示される。それは通常、成文法の規程であったり、過去の判例であったりするのだが、時には「生存権」や「プライバシー権」のようなものや「公共の福祉」や「公序良俗」、さらには「自然権」「公正性」であったりする。このような場合には、「正当化する理由」の「根拠」らしきものは、明らかにそこで新しく創造され、もっともらしい恭しさでもって提示されるのである。現代リベラリズムはこのリーズニングの様式にならい「正義」や「責任」や「中立性」を恭しく掲げて規範的理論を構成しようとしたのである。しかし、司法判断にはいつも異論があり、リーズニングが正当でないという意見が常に存在しうる。ただ、司法制度という権力装置のもとで、異論には実効性が与えられないだけだ。

何らかの疑いえない普遍的に妥当する規範的原理を探し出して、その基盤から、個々の社会制度や規範やあるいは規範理論に対して「正義にかなっている」か「かなっていないか」の判定を下すことができるのではないかという現代リベラリズムの夢がかなえられることは絶対にないのである。

私は、もともとのリベラリズムとは、社会の多元性という現実を前にしたときに、何か単一の原理でもって裁断しようとするのではなく、異なる文化、生き方、価値をお互いに尊重しつつ内省と熟慮と辛抱強い討論とを通じて、共通に奉じうる了解と価値とを新しく創造していこうとする態度を意味していたのではないかと考えている。現代リベラリズムは、それからはほとんど対極に位置するものになってしまったように思われる。

（盛山　和夫・せいやま　かずお）
東京大学大学院人文社会系研究科教授、博士（社会学）

現代リベラリズムとは何であったか　ブックリスト

出版社	ISBN (978)	書　名	著　者　名	本体価格	刊行
法政大学出版局	4588006517	法の力	ジャック・デリダ	2300	1999
木鐸社	4833223270	平等とは何か	ロナルド・ドゥオーキン	6500	2002
木鐸社	4833223263	権利論　増補版	ロナルド・ドゥオーキン	4000	2003
勁草書房	4326101689	ロールズのカント的構成主義	福間聡	3500	2007
東洋経済新報社	4492313107	正義の経済哲学	後藤玲子	4200	2002
昭和堂	4812291245	自由主義	ジョン・グレイ	2039	1991
ミネルヴァ書房	4623032808	自由主義論	ジョン・グレイ	3800	2001
春風社	4861101120	ロールズ—誤解された政治哲学	堀巌雄	4700	2007
新世社	4883840427	〈新しい市場社会〉の構想	佐伯啓思・松原隆一郎編著	2200	2002
創文社	4423730331	共生の作法	井上達夫	3800	1986
創文社	4423730911	他者への自由	井上達夫	3500	1999
創文社	4423730737	現代倫理学の冒険	川本隆史	3500	1995
講談社	4062743600	ロールズ—正義の原理	川本隆史	2500	1997
勁草書房	4326601608	責任と正義	北田暁大	4900	2003
勁草書房	4326101405	リベラルな共同体	小泉良幸	3500	2002
日本経済評論社	4818817708	現代政治理論　新版	ウィル・キムリッカ	4500	2005
水声社	4891761592	ポスト・モダンの条件—知・社会・言語ゲーム	ジャン＝フランソワ・リオタール	2500	1986
勁草書房	4326199075	責任と自由	成田和信	2800	2004
木鐸社	4833200646	公正としての正義	ジョン・ロールズ	2500	1979
紀伊國屋書店	4314002639	正義論	ジョン・ロールズ	品切	1979
岩波書店	4000228466	公正としての正義再説	ジョン・ロールズ	3400	2004
岩波書店	4000264181	連帯と自由の哲学	リチャード・ローティ	3000	1999

出版社	ISBN (978)	書　名	著　者　名	本体価格	刊行
晃洋書房	4771011991	アメリカ未完のプロジェクト—２０世紀アメリカにおける左翼思想	リチャード・ローティ	1900	2000
岩波書店	4000255561	リベラル・ユートピアという希望	リチャード・ローティ	3200	2002
東京大学出版会	4130430173	「きめ方」の論理	佐伯胖	2500	1980
創文社	4423730782	制度論の構図	盛山和夫	4200	1995
東京大学出版会	4130341332	権力	盛山和夫	2600	2000
勁草書房	4326653164	リベラリズムとは何か	盛山和夫	3300	2006
東京大学出版会	4130511193	福祉の公共哲学	塩野谷祐一・鈴村興太郎・後藤玲子編	4200	2004
勁草書房	4326152179	合理的な愚か者	アマルティア・セン	3000	1989
筑摩書房	4480408143	経済計画理論	鈴村　興太郎	品切	1982
実教出版	4407028126	アマルティア・セン—経済学と倫理学	鈴村興太郎・後藤玲子	2800	2001
ナカニシヤ出版	4888485050	アナリティカル・マルキシズム	高増明・松井暁編	2600	1999
青木書店	4250990496	現代平等論ガイド	竹内章郎	2200	1999
青木書店	4250201233	平等論哲学への道程	竹内章郎	2900	2001
勁草書房	4326101504	責任の意味と制度	瀧川裕英	3500	2003
岩波書店	4006030599	正義論／自由論—寛容の時代へ	土屋恵一郎	1000	2002
春秋社	4393621639	ロールズ正義論の行方　増補新装版	渡辺幹雄	5300	2000

「無料貸本屋」から「情報の町医者」へ：静岡市立御幸町図書館のめざすもの

豊田　高広

「無料貸本屋」批判から

日本の公共図書館は「無料貸本屋」と揶揄されることがある。一九九八年、津野海太郎氏は日本図書館協会の機関誌『図書館雑誌』に次のように書いた。

『失楽園』は十五人待ちです。／この種の表示をロビーで目にするたびに、正直いって「へっ」と思う。「なにが公共図書館だよ、ただの貸本屋じゃないか」とつい感じてしまう。（中略）／こうした図書館「無料貸本屋」化のはじまりには、おそらく、本の保存ではなく利用を正面に打ち出した一九六〇年代、七〇年代の市民図書館運動があるのだろう。[1]

「いますぐ売れる本」を最優先する出版市場の「市場至上主義」と、「いますぐ読まれる本」を最優先する公共図書館の「貸出至上主義」が限りなく接近することにより、本の文化の多様性や、公共図書館がもつ貸出以外の役割がおろそかになっていないか、という津野氏の問いかけが、『図書館雑誌』[2]誌上の論争に発展し、公共図書館の役割を巡るさまざまな議論につながっていった。

その後、公共図書館の現場では、「無料貸本屋」という批判に応えるように、さまざまな実践が展開されている。図書館には本来の使命というものがあり、貸出はそれを達成するための手段のひとつに過ぎない。「無料貸本屋」批判は、図書館員がこのような当り前のことに気がつく一つの重要なきっかけになったのである。

筆者が開館業務に携わり、現在は館長を務める静岡市立御幸町図書館のさまざまな試みも、あらためて御幸町

図書館独自の使命を明らかにし、そのために必要なコレクションやサービスを用意することを通じて「貸出至上主義」を乗り越えようとするものであったといえる。

御幸町図書館の試み

静岡市立御幸町図書館は、公共図書館におけるビジネス支援サービスの先駆けとなった図書館の一つである。御幸町図書館が開館したのは二〇〇四年九月、東京都品川区が日本初の本格的なビジネス支援図書館を開設してから二ヵ月ほど後のことであった。その頃まで、仕事のための資料を求める人々を明確なターゲットとしたサービスは、市区町村立図書館にとって、ほとんど未踏の領域だったのである。

静岡市の場合も、御幸町図書館が開館するまでは、児童書や文芸書、生活実用書の提供に重点を置いてきた。その次が地域資料や人文科学関係の資料の収集であり、ビジネスは最も苦手とする分野の一つであった。したがって、ビジネス支援サービスの準備にあたっては、静岡市の経済政策担当部局と連携し、静岡県内の中小企業診断士や静岡市内のＳＯＨＯ事業者への聞き取り調査などを行いつつ、コレクション構成やサービスメニューに関する吟味を重ねた。

あるときには、中小企業診断士の「僕らよりも、エンドユーザーのことを考えた資料構成がいいと思うよ」という言葉が重要なヒントになった。また、ＳＯＨＯ事業者の「情報のコンシェルジェみたいな存在が図書館には必要だね」あるいは「家を設計するには古建築の資料だって欲しいことがある、いわゆるビジネス書みたいなものだけが入用なわけじゃないよ」といったコメントが筆者の悩みを深めることになった。

従来の地域図書館としてのサービスに加え、ビジネス支援と多言語（多文化）サービスを看板にかかげた静岡市立御幸町図書館が開館した時点では、試行錯誤の真っ只中にいるというのが筆者の正直な感想だった。その感覚は現在も続いている。最近では、試行錯誤そのものを仮説と実験の繰り返しのプロセスとして事業の中に組み込めんでいけばよいと考えている。「貸出至上主義」は批判されるべきだが、仮説と実験の一致の程度を測る指標としての貸出点数は重要だと思う。

御幸町図書館の前身は、静岡市立追手町図書館であり、静岡市役所の一角を占めていた。現在の御幸町図書館は、静岡市の繁華街のほぼ中心部に位置する再開発ビルに追手町図書館を移転・拡充したものである。ペガサートと

静岡市立御幸町図書館

名づけられたこのビルの四・五階に位置する御幸町図書館は、床面積二〇九四平米、蔵書数約一二万点という規模である。当然のことながら、周辺地域住民のための地域図書館としての機能を追手町図書館から受け継いでいる（主に四階の機能）。だが、その一方では六・七階に併設された静岡市産学交流センターと連携してビジネス支援サービスを行い、さらには外国人住民等を対象とした多言語サービスをも提供している（主に五階の機能）。従来の静岡市立図書館にはなかったこれらの新しいサービスに役立てるため、約二〇タイトルの商用データベースとインターネットにアクセスできる利用者用パソコン約三〇台を館内に設置している。約四〇〇タイトルの雑誌・新聞の内訳も、ビジネスのための利用者や外国人向けのものが多い。二〇〇六年度の一日当たりの入館者数は約一八〇〇人、個人貸出点数は約一四〇〇点であった。入館者数については、静岡市内に一〇館ある市立図書館の中でも最多となっている。

「情報の町医者」という役割

御幸町図書館の開館から三年以上が経過した。開館準備事業の立ち上げの時点から数えれば約七年である。こ

の間に経験したり考えたりしたことは、『図書館はまちの真ん中』（勁草書房）に書かせていただいた。学識経験者として、あるいは市民として開設に関わっていただいた竹内比呂也氏・平野雅彦氏との共著である。最近では、御幸町図書館での活動を通じて「無料貸本屋」に変わる新しい公共図書館の理念のヒントが見えてきた。とりあえず、このアイデアを「情報の町医者（あるいはホームドクター）」と名づけてみたい。

信頼のおける町医者（公共図書館）とは、その町の人々にとって、どんな病気（課題）にかかったとしても、最初に受診してみようと思える存在である。とりあえずの処方箋（資料、情報）を提供してもらうと同時に、必要に応じて、より専門的な病院（都道府県立図書館、国会図書館、大学図書館、専門情報機関、公的機関の相談窓口、社会教育講座等）や薬局（書店）を紹介してもらう。大病にかからないための健康法（メディア・リテラシー）のアドバイスもしてもらえる。往診（移動図書館などのアウトリーチ・サービス）も町医者独自の機能だろう。保健所（行政各部局）と協力して、寝たきりをなくす（情報による自立支援）まちづくりへの取組も考えられよう。

このような「町医者」としての図書館に求められるのは特定分野に特化したサービスではない。それは専門的な情報サービスの窓口に求められる仕事である。

では、「情報の町医者」としての公共図書館に必要とされるのは何か。コレクションという観点から二点を指摘したい。

「情報の町医者」に第一に必要とされるのは、「地域の記憶」ともいうべき、設置自治体とその周辺の地域資料の集積である。患者にとって必要なのが自分自身の心身についての知識であるように、ある地域で働き、暮らし、活動する人々にとって必要なのはその地域に関する知識であろう。地域資料については図書館が本来の守備範囲としている公刊された著作物等に限定せず、各種の文化財や記録文書を含め、博物館や公文書館と連携した徹底的な収集と保存の体制を整備する必要がある。博物館や公文書館の設置が難しい自治体では、図書館に、文化財の専門家（学芸員）や記録文書の専門家（アーキビスト）を配置することも考える必要がある。

「情報の町医者」に第二に必要とされるのは、さまざまな専門の入門となり得るような「広く浅い」蔵書構成である。森羅万象にわたる「広く浅い」品揃えは、公共図書館の弱みではなく強みと認識するべきである。もちろん、浅くても入門の役割を良く果たし得る蔵書構成を

維持することは、けっして簡単ではない。実用を旨とした品揃えであっても、たとえば実用書の実用性を成立させている知のバックボーンとして、数々の古典をはじめとする人文書や自然科学書の厚みをどの程度にするかは、さまざまな調査に用いるいわゆる参考図書（そして近年ではデータベース）のラインナップと共に、図書館員の腕の見せ所である。

御幸町図書館の場合、ビジネス支援と銘打つサービスをする以上、「労働とは？」「市場とは？」「会社とは？」といった問いに答える本（思想書や歴史書を含む）も、そこになければならないのは当然のことと考えている。小・中学生がお金や職業について考えるための本から、大人でもなかなか歯が立たないマルクス、ケインズ、ハイエクのような古典や、城山三郎等の経済小説まで、一見して実用的とは言えないような本も並んでいるのが公共図書館らしさというものであろう。

「情報の町医者」という言葉は、公共図書館がこれから確立するべき新たな使命の一面を表わすに過ぎない。しかし、健康食品に関する情報操作や、ウェブ上の百科事典の意図的な書き換えなど、マスメディアやインターネットをめぐる「情報に病んだ社会」とでもいうべき近年の風潮を見ていると、案外、悪くない喩えかもしれないと思えてくる。

（一）津野海太郎「市民図書館という理想のゆくえ」『図書館雑誌』一九九八・五
その後、下記に収録された。引用は下記による。
津野海太郎『だれのための電子図書館？』トランスアート、一九九九

（二）津野海太郎の前掲書に、論争に関わる論文が収録されている。

（とよだ　たかひろ・静岡市立御幸町図書館長）

東京国際ブックフェアの変遷と展望

星野　渉

ブックフェア

今年で十四回目を迎えた東京国際ブックフェア（略称ＴＩＢＦ、主催リードエグジビションジャパン＝以下リードジャパン）は、世界三十カ国・地域から七七〇社が出展し、来場者数は五万人を超える国内最大のブックフェアに成長した。

海外、特にアジア諸国からも多くの出版関係者が集まり、国際的な年中行事としても定着してきたようだ。その一方で業界には、「欧米の主要ブックフェアのような位置づけが希薄」、「中堅どころの主要出版社が少ない」、「電子機器など出版社以外の出展者が多すぎる」などといった批判の声も存在する。

このブックフェアは、業界団体が主催する催事として始まり、展示会専門業者リードジャパンによる運営、国際化、展示場の変更、開催権の譲渡など変遷をたどってここまで来た。その意味で現在もＴＩＢＦは、変化を続けている発展途上のフェアであるといえる。

さらに、昨年から同時期に開催されている「本の学校出版産業シンポジウム」といった新たな動きも現れている。そうした動きも含め、ＴＩＢＦの役割と今後の方向性を改めて問い直す時期にさしかかっているように思われる。

国内外からこれだけの来場者を集めている展示会を、さらに出版業界の人々に有益なイベントにするためにはどうすればよいのかという視点から、ＴＩＢＦの現状と、このフェアがたどってきた道のりを概観しながら考えてみたい。

Ｇｏｏｇｌｅが注目を集めた二〇〇七年のＴＩＢＦ

今年のＴＩＢＦは七月五日から八日まで、東京・有明の東京ビッグサイトで開かれ、主催者発表によれば、出展者、来場者とも過去最高を記録した。

展示会場で一番注目されたのは、出版社の出展ではなく、この会期に合わせて新サービスをスタートさせたＧｏｏｇｌｅの出展であった。

世界中の書籍を電子化し検索エンジン「Ｇｏｏｇｌｅ」の検索対象にするという「Ｇｏｏｇｌブックサーチ」の日本語対応は、業界内にとどまらず、一般のメディアからも注目を集めた。

米国から同サービスの責任者が来日し、会期初日の午前中には渋谷の同本社に報道関係者を集めて会見を開き、会場では自社ブースで出版関係者やマスコミに向けて新サービスの内容をアピールした。この模様は各種メディアで報道され、ブックフェアへの関心を高める効果も果たした。

同社の出展は、「ブックサーチ」への出版社登録受付を開始した昨年に続く二回目だった。このように、業界外の企業が出版業界に事業をアピールする場所としても、ＴＩＢＦは利用されている。

〇三年には電子書籍閲覧端末「ΣＢｏｏｋ」を発売した松下電器産業が、〇四年には「ＬＩＢＲＩｅ」を発売したソニーが、それぞれ大型ブースを出展していたし、インターネットでダウンロード型電子書店を運営する各社なども、このところ毎年出展する常連になった。特に今年は昨年から本格化している携帯電話向け電子書籍（コミック）の取次業務を手がけるビットウェイ、モバイルブックジェイピー、パピレスなどが、一斉に電子取次業務をアピールしていた。また、出版向けソフトを提供しているアドビも常連の一社である。

こうした企業は出展の目的が明確で、集中的に投資して派手なブースを出すため、フェアを盛り上げる役目を果たしている。そして、以前ならコンピューター系の展示会に力を割いていたこれら企業がＴＩＢＦを利用しているということは、ＴＩＢＦが出版業界最大のイベントであることが業界の外でも認識されていることを意味している。

直取引出版社は積極的に出展

一方、出版社の展示で目を引いたのは、パンローリン

グやトランスビューといった書店直取引出版社のブースだ。いずれも企業規模はそれほど大きくないが、同規模の出版社に比べると相当大きなブースを出していた。

パンローリングは書店と直接取引で翻訳ビジネス書を中心に刊行してきたが、最近は復刻マンガに力を入れており、今年は入り口付近に大型ブースを出して多くの来場者に復刻マンガをアピールしていた。

また、池田晶子著『14歳からの哲学』で有名になったトランスビューは、社長と役員の計三人という小規模ながら、昨年に続いてブースを出展。書店人に依頼して作った人文書のモデル棚（他社の書籍も入れている）の展示は、前回よりも種類を増やし、レベルアップしていた。

こうした直取引出版社にとって、ＴＩＢＦはまさに書店や読者との接点として有効な場になっている。こうした出版社は取次会社を通さない分、書店とは顔の見える関係にしておかないと仕事がスムーズに進まない。そしてブックフェアでは、通常、電話やメールでやりとりしている書店担当者が、向こうから来場してくれるというメリットは大きい。また、少人数のため広範には営業に回れない彼らにとって、未知の書店人と出会うチャンスでもある。いわば他の出版社が集めてくれた書店や読者が、彼らのお客さんになりうる場なのだ。

消極的な大手出版社

これらとは対照的なのが、大手出版社のブースだ。書店向けの窓口すら設けずに、読者向け割引販売やパネル展示、中には商品を並べるだけで販売も受注もせず、明らかに業界行事へのおつきあいという姿勢がありありの出版社もある。

もちろんこれらの出版社は、いまさら書店に自社をアピールする必要性に乏しく、主要な取引先には販売促進担当者が訪問し、商談はすませている。また、取次会社を通して潤沢に商品供給しているので、下手に会場で受注したりすれば、過剰送品の原因を作りかねないという感覚が強い。

書店向けの商談を行う場というＴＩＢＦの位置づけは、大手出版社の出展目的にはなりにくい。彼らの出展内容の多くが、読書推進活動や謝恩販売に集中してきていることからも、大手出版社の出展目的が読者謝恩に置かれていることは明らかだ。ＴＩＢＦが基本的にはビジネスフェアとしての枠組みを持ちながら、一般読者が多く集まるイベントになっているのはこのためであろう。

本の学校シンポジウム

もう一つ、前年から始まった「本の学校出版産業シンポジウム」の第二回が、ＴＩＢＦ会場に隣接する会議棟で開かれたが、これは私が直接関わった催しでもあるので、少し詳しく報告しておきたい。

このシンポジウムは、鳥取県米子市で「本の学校」を運営する本の学校運営委員会が主催し、日本書店商業組合連合会、日本雑誌協会、書店新風会、日本書店大学、日本出版学会の協賛で七日土曜日に開かれた。実際の企画、運営は、今井書店グループの永井伸和会長と、私や若手出版人が中心になって組織した実行委員会があたっている。

午前中にリードジャパンとの共催で開いた第一部「書店に未来はあるのか――大型書店から街の本屋まで、激変期の書店経営者が徹底討論」は、日本書店大学学長の田辺聰氏がコーディネーターを務め、大垣守弘氏（京都・大垣書店）、世良興志雄氏（広島・フタバ図書）、高須博久氏（豊橋・豊川堂）、高野幸生氏（ＴＳＵＴＡＹＡ商品本部ＢＯＯＫ企画グループ）がパネリストとして参加し、地域書店の役割や、必要な書店マージン率の提案など、かなり突っ込んだ議論が行われた。

そして午後の第二部は分科会に分かれ、具体的なテーマに即して行った。

第一分科会「書店協業化の可能性―中小書店が展望を持つために」はコーディネーターを私が務め、パネリストに渡辺順一（ＮＥＴ21代表取締役社長、進駸堂）、柴田信（岩波ブックセンター信山社）、吉見光太郎（ＮＥＴ21取締役、吉見書店）の各氏を迎え、神保町再生プロジェクトとＮＥＴ21という実際の協業について、組織作りから意思統一の方法などが報告された。

第二分科会「雑誌で支える書店経営―『私はこうして雑誌売上を伸ばしました』」は日本雑誌協会との共催で企画し、コーディネーターを雑協の名女川勝彦氏（文藝春秋）が務め、伊藤清彦（さわや書店）、森岡葉子（くまざわ書店）の両氏がパネリストとして、それぞれ有効な雑誌の販売方法を紹介。第三分科会「地域密着と古書新刊併売―米国独立系書店の生き残り戦略」は、私がコーディネーターとなって、米国最大の独立系書店パウエルズ・ブックスのマイケル・パウエル氏を招き、フタバ図書の世良興志雄氏とともに、新刊と古書の併売と地域密着戦略について語ってもらった。

第四分科会「若手書店人の力―現場発のコラボレーシ

ョン」は、ＮＰＯ本屋大賞実行委員会理事の杉江由次氏（本の雑誌社）をコーディネーターに、現場で活躍する若手書店人の白川浩介（オリオン書房、ＮＰＯ本屋大賞実行委員会理事）、高坂浩一（堀江良文堂書店・千葉会）、高橋美里（ときわ書房・森見登美彦書店応援団まなみ組）の三氏がパネリストとして、現場発の取り組みについて議論を行った。

このシンポジウムは、九五年から九九年まで五年間にわたって鳥取県大山町で開かれた「大山緑陰シンポジウム」の精神を引き継ぐことを目的に企画された。今井書店の永井会長が「本の学校」開校のプレイベントとして開いた大山シンポは、毎回数百人の業界人が集まり、昼間の分科会形式の議論はもとより、文字通り夜を徹して出版について語り合う場になった。

そして、ここでの出会いから、朝の一〇分間読書の全国展開、季刊『本とコンピューター』創刊、青空文庫の広がり、往来堂書店の開業といった様々なものが生み出された。こうした人と人とが出会い、参加者が展望やヒントを得られる場所を作りたいという思いが、かつてこの場に参加した実行委員のメンバーを動かしている。

また、私個人としては、ＴＩＢＦという業界人が集まる場所をより活かしたいという思いがあった。何度か訪問してきた米国のブックフェア・ブックエキスポアメリカ（ＢＥＡ）では、業界人研修のためにいくつものセミナーが開かれている。そのセミナーの多くは米国書店組合（ＡＢＡ）が組合員書店に向けた教育プログラムの一環として企画している。そこでは書店人に必要な販売、経営、財務、プロモーションといったプログラムから、マンガの取り扱いや新刊と古書の併売といった最新動向を報告するものまで、多種多様な講座が開かれている。

「本の学校出版産業シンポジウム」は、まだボランティアによる試行錯誤の活動ではあるが、日本で出版業界人が集まるＴＩＢＦを、業界人がヒントを見つけたり、最新の情報に触れる場にして、特に日々店頭で忙しく働いている書店人が、年に一度は日常業務から離れ、業界全体の動きや将来のことを考えて、仕事に対する新たな意欲を持てるような機会にできないか。そして、そういう場にすることで、ＴＩＢＦがより出版業界にとって、そして出展者、来場者にとって意味のある場所になるのではないかという提案でもある。

日本におけるブックフェアの変遷

海外のブックフェアをみていると、その目的は書店を

呼んで書籍の売り込みをするフェア、各国の出版人が集まって国際的な出版権取引を行うものなど様々である。そしてそうした目的は、それぞれの国や地域における出版ビジネスの形や、ブックフェアがたどってきた歴史によって左右されている。

日本におけるブックフェアの歴史は、中世から続くドイツのフランクフルトブックフェアや、一九〇〇年に第一回が開かれた米国のＡＢＡコンベンション（現在のＢＥＡ）などに比べ、それほど古いものではない。

日本書籍出版協会などの出版業界団体が一九八四年に開いた第一回のフェアは、「日本の本展」という読者向けのイベントで、八八年に開いた第三回から「東京ブックフェア」に名称を変えた。

そんな国内の一般読者向けだったブックフェアに〝国際〟の冠がついたのが九二年、そして運営を現在の主催者であるリードジャパンが担当する形になったのは九四年からだった。

実はそれ以前の九〇年二月に、カーナーズエキスポジションジャパンという展示会会社（現在のリードジャパン、社長は現リードジャパン・石積忠夫社長）が、国際ブックフェアを企画。日本で初めての国際的な著作権取引を目的としたブックフェアを、東京・晴海の展示場で開催するということで、出版社などへの出展交渉を開始した。

ところが、国内向けのブックフェアを開催してきた出版業界団体は、事前の協議なかったなどとして反発、欧米からはランダムハウスなど有名な大手出版社が数多く出展する中、日本からは日本出版販売国際部、福音館書店などごく一部を除きほとんど出展しない事態となった。結局、カーナーズ社は当初、定期開催するといっていたこのフェアを一回で断念せざるを得なかった。

当時の業界側の反発には、単に事前の話がなかったという行き違いのほかに、ブックフェアをあくまでもビジネスの場だと位置づけるカーナーズ社の考え方に対する違和感があった。当時の出版業界には、今以上に出版物を「商品」といったり、出版を「ビジネス」、本の売り方を「マーケティング」と呼ぶような姿勢への反発が強かった。この感覚のズレは、その後のＴＩＢＦでも、絶えず感じられてきたことである。

そしてこのフェアに反発した出版業界団体側は、九二年の東京ブックフェアを〝国際〟化して開催した。これはカーナーズ社の動きを意識しただけではなく、業界側にも国際化を進める機運があったからだ。当時、書協の国際委員長だった前田完治氏が中心となって、ブックフ

ェアの国際化と、さらに、アジア・太平洋地域の出版交流を進めるアジア・太平洋出版連合（ＡＰＰＡ）構想が推進されていた。もちろん、ビジネス色よりも出版文化交流という側面が全面に押し出されていたことは言うまでもない。今考えてみると、出版業界はまだそれほど深刻な不況に見舞われていない時代でもあった。

出版業界団体とリードジャパンの共催へ

当初の東京ブックフェアは、業界団体が組織した実行委員会が主催し、書協の事務局と広告代理店の博報堂が実際の運営に当たっていた。名著の復刊企画など読者を意識した面白い試みが行われていたが、これらは出版社の営業担当者が中心になって組織した委員会が、まさに無償の業界仕事として行っていた。

業界団体が開いた初の国際ブックフェアとなった九二年は、それまでにない大がかりなものとなったが、事務方からは、これだけのイベントを業界団体と出版社のボランティアだけで継続するのは無理だという声が上がった。国内向けのイベントとは違い、世界中の出版社への出展依頼から様々なやりとりを行う必要があり、とても片手間でできる仕事ではないからだ。

こうして、運営は専門の業者に任せなければとても国際ブックフェアを継続することは出来ないという業界団体側の事情と、ブックフェアの開催を望んでいたリードジャパン（カーナーズ社から移行）の思惑が一致し、業界団体が主催し、リードジャパンが運営するというその後のＴＩＢＦの形ができあがり、第一回ＴＩＢＦは九四年に千葉県の幕張メッセで開かれた。このとき、同じ会場でＡＰＰＡの設立総会も開かれた。

ＴＩＢＦの変化

しかし、このような流れでできあがったブックフェアが、最初から必ずしも順風満帆だったわけではない。出展社は九二年のフェアに比べ大幅に増加したが、リードジャパンが掲げたビジネスフェアという位置づけに、違和感を感じる出版人も少なくなかったからだ。

そうした流れの中で、ＴＩＢＦが業界催事として位置付けられるきっかけになったのは、公正取引委員会による再販制度の見直しだった。九一年から始まった「政府規制等と競争政策に関する研究会」（座長・鶴田俊政専大教授）の提言に基づく再販制度見直しは、二〇〇一年三月に公取委が制度を「当面存置」するとの結論を出す

まで約一〇年間にわたって業界最大のテーマであった。

この中で、公取委は業界に対して、再販制度の弊害を少なくするため時限再販、部分再販を活用することを強く求め、業界側ではそれをアピールする場として、ＴＩＢＦ会場での割引販売を始めた。これが、現在でもＴＩＢＦの目玉の一つとなっている出展者による割引販売である。

それまで原則禁じられていた読者への即売が解禁されたことで、それを目的として出展する出版社が現れるようになった。また、読者にとっても年に一回、二～五割引で新刊書が購入できる場所だとの認識が広がり、本好きのリピーターが集まるようになった。

次に迎えた大きな変化は、展示会場の変更だった。幕張メッセからより都心に近い東京ビッグサイトに会場が移されたことは、割引販売とともに一般来場者を集客することに役立った。また、首都圏に集中している出版社にとっても、会場へのアクセスが良くなった。

展示企業も、徐々に拡大していった。当初から想定されていた出版社、印刷会社を中心とした出版業界周辺の企業から、先に挙げた電子機器メーカーや、出版社向けの情報システム会社や、書店のＰＯＳレジ開発会社なども出展するようになった。

運営面での大きな変化は、二〇〇二年に開催権が業界団体で構成する実行委員会からリードジャパンに移ったことだ。それ以降は実行委員会とリードジャパンの共催という形となり、開催のイニシアティブはリードジャパンが握ることになる。その後、リードジャパンは二〇〇五年に開催時期を「世界本の日」（旧サンジョルディの日）がある四月から、教科書シーズンを避けて七月に変更した。

ブックフェアの目的と役割

古くから行われているブックフェアにはそれぞれ明確な目的と役割がある場合が多い。世界最大の八〇〇〇社以上が出展するフランクフルトブックフェア（ＦＢＦ）では、国際的な出版権の取引が盛んに行われているし、イタリアのボローニャで三月に開かれるボローニャ国際児童図書展は、世界の児童書関係者が一堂に集まるイベントとして定着している。また、米国のＢＥＡはもともとＡＢＡ総会からスタートしているだけに、来場した書店に出版社が次シーズンの新企画を売り込んだり、書店がリメインダー（出版社のオーバーストックを低価格で提供する業者。日本での自由価格本・バーゲンブックに

相当する）を仕入れる場として機能している。

ＴＩＢＦの場合はどうかというと、リードジャパンが当初掲げていた目標は、出版社と書店の取引、海外出版社との版権（翻訳出版権）取引といったビジネスである。これに、割引販売を初めとした読者サービス、そしてＧｏｏｇｌｅなどのような出版社に対するアピールを加えた四つが、主な目的といってよいだろう。

この中の出展者と書店との取引については、日本の場合、取次システムによって新刊本が書店に供給されているため、ブックフェアで近刊を受注するといった活動は、直取引出版社でなければ重視されにくい。リードジャパンは特別報償などによる促進を行うよう出展者に提案しているが、返品が自由な現在の取引条件下では、あまり出版社が乗り気になっていないのが現状である。

ただ、今年はこれまで読者向けの即売を中心に出展してきた「書物復権八社の会」（岩波書店、紀伊國屋書店、勁草書房、東京大学出版会、白水社、法政大学出版局、みすず書房、未来社）が、共同で書店向けの企画説明会を開くという動きがあった。老舗専門書系出版社によるこうした活動は新たな試みであり、現状の取引制度のもとでも、書店向け説明会などを定期的に実施していない中堅出版社にとって、書店に対する企画のアピールは確かに有効だといえよう。

バーゲンブックの出展が二つに

また、書店向けということで今年注目すべき出展があった。それは書店に自由価格本（バーゲンブック）を卸す会社の出展が二社になったことだ。

一つは以前から毎年出展し、バーゲンブックの書店への卸販売と、会場での即売を実施している八木書店・第二出版販売のブースだ。

同社は以前、読者謝恩のために書店組合が出していたブースに共同出展して、即売を中心に行ってきたが、いまでは単独ブースを出し、書店や他の流通業からの引き合いも増えたという。

もう一つは、ダイヤ書房（北海道）と啓文社（広島県）の共同ブースだ。こちらは今回初めての出展だったが、書店などからの引き合いも結構あったという。

実は米国のブックフェアではここ数年、リメインダー業者の出展が急拡大している。リメインダーは出版社が一度通常ルートで販売していた本を、再び低価格で市場に供給するもので、書店は買い切り条件となるため現物をみて仕入れ数を決定する。ブックフェアがその一大仕

入れ会場と化しているのだ。

新刊はほとんどが取次会社の配本で供給されている日本でも、買い切り条件のバーゲンブックは現物を確認して仕入れる必要がある。今回初めて複数のバーゲンブック業者が出展したことで、今後、ＴＩＢＦがバーゲンブックを仕入れる場所として拡大していくことも予想される。

このほか、海外出版社との出版権取引については、一定の役割を果たし始めている。大手出版社は、既にＦＢＦやロンドンブックフェアで商談は終わっているとして、あまりＴＩＢＦでの出版権取引を重視していないが、少なくとも中国、韓国、台湾といった近隣諸国からはＴＩＢＦに合わせて毎年多くの出版人が来日しており、日常的に海外との取引をしているわけではない中小規模の出版社にとっては、自社出版物の出版権を売るチャンスになってきている。ただ、欧米の主要出版社の出展は相変わらずほとんどなく、むしろ彼らは巨大市場である中国を見据えて、北京国際図書展に出展しているようだ。

一方、読者謝恩の場として最もＴＩＢＦを活用しているのは児童書の出版社だ。各社が個別のブースを出すほかに、共同のイベントスペースを設け、一般来場日である土日は、通路を通り抜けられないほどに親子連れが集まる。活字離れなどと言われる一方で、これだけ多くの親が子どもに本を読ませようとし、子どもも熱心に読みいっている姿をみると、読者謝恩もＴＩＢＦ開催の大きな役割だと認識させられる。

主要出版社の主体的な関わりが重要

出版業界には、ＴＩＢＦに欧米の主要ブックフェアのようなはっきりとした目的がみえないという批判の声も根強い。出版社の中にはリードジャパンが呼びかけるビジネス的なメリットに違和感を感じているところもいまだ少なくない。しかし、その成り立ちからして、ＴＩＢＦはいくつもの目的を共存させざるを得ないのであり、そうした曲折を経ながらもこれだけのイベントに成長してきたといえる。

そういう意味では、読者謝恩や国際化、そして業界人の交流などのためにブックフェアを開催したいと思う業界側と、出展者や来場者を数多く集めて展示会のビジネスを安定、発展させたいリードジャパンが、良い意味でお互いを利用し合う関係が保たれれば良いのではないだろうか。そのためには、このフェアの最も重要な出展者である主要出版社が、それぞれ自分たちの目的を持って、

主体的に関わることが必要であろう。

出版業界団体がリードジャパンに開催権を譲渡して五年がたつ。ただ、開催権を譲渡したからといって、ＴＩＢＦが出版業界にとって最大のイベントであることに変わりはない。そして、多くの一般読者と業界人が集まるＴＩＢＦは、いまや業界団体やリードジャパンといった一団体、一企業の専有物だとすらいえなくなっている。

展示会は出展するそれぞれの企業、団体が主体的に目的達成のための努力をして、初めて参加者にとって有効な場になる。是非とも出版業界側がよりこのブックフェアに積極的にコミットし、これまで以上に有意義な場にしていってもらいたいと思う。

（ほしの　わたる・文化通信社）

代表幹事あいさつ

春秋社　鎌内　宣行

五月一八日に開催された人文会年次総会において、白水社の佐藤英明氏に代わり私が第七代の代表幹事に選出されました。また、書記幹事には誠信書房の新保卓夫氏、会計幹事には御茶の水書房の平石修氏が重任し、三役を構成することになりました。

委員会構成は昨年度を踏襲し、販売委員会の下に企画・研修・図書館の三グループ。広報委員会の下に広報・ホームページの二グループ体制を継続することになりました。販売委員長はみすず書房の田﨑洋幸氏、広報委員長には勁草書房の吉武創氏が就任いたしました。また、総会において会長職の復活が承認され、筑摩書房の菊池明郎氏に就いて頂きました。

以上の体制で二〇〇七年度の会活動が始動いたしました。よろしくお願い致します。

昨年度に刊行した『人文会ニュース一〇〇号記念号』では人文会の設立の経緯を含む会活動の検証、現役若手書店人の座談会など、人文会活動を皆様方にアピールできたものと考えています。販売委員会が取り組んでいる人文書の新ジャンル分けと新基本図書の構築は本年度に引き継がれ、まもなく完成致します。また、広報委員会が担当のホームページについては書店様への有効な情報を発信するツールとしてリニューアルが進んでいます。

今年度の両委員会の活動はそれぞれ、委員長の活動方針で明らかにされていますが、会活動は書店様・図書館様などに人文書をいかに普及させていくのか、具体的には何を提供できるのかが問われています。折しも、来年は人文会創立四〇周年を迎えます。新しい分類と新基本図書の具体的な提供など（『人文書のすすめ［改訂版］』）も検討中です。ご

期待ください。

今年度は会員社の中で五社の担当者の変更がありました。書店現場を担当しているメンバーも増えてきています。より書店現場の皆様と密に情報交換も出来るのではないかと感じています。書店様との研修・ブックフェアの開催・図書館様への提案・『人文会ニュース』の発行・ホームページの活用、等々を通じて必ずや皆様方のご期待に応える所存です。そのためには皆様方からのご意見ご提案ご批判等が不可欠だと考えます。皆様のお力をお借りして人文書を一冊でも多く読者に販売することを目指したいと思います。今年度の人文会活動をどうぞご注目ください。

委員会活動方針

販売委員会

販売委員会委員長　田﨑洋幸

本年総会をもちまして、販売委員長に就任いたしました。委員会はその名の通り、販売を前提としております。種をまき、水を与え、効率よく刈り取ることを実践することで、人文会の存在意義を示すことが出来ればと考えております。その為には全会員社の結束が欠かせません。新規メンバーが多いこともあり、前期より引き続き会の担当になられた方との意思の疎通も重要になります。ご協力をお願いいたします。

委員会は企画グループ・研修グループ・図書館グループの三グループで構成されています。書店様、販売会社様、図書館様との交流を通じて情報を共有し、そのことが人文書を普及させることと信じて活動しています。忌憚のない意見交換、データの共有、ご要望に対してどのように対処できるかを真摯に検討、実行できればと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

各グループの方針は以下になります。

企画グループ

最大の目標は、『人文書新ジャンル』を完成させること。三年越しのこの大きな取り組みを必ず実らせたいと思います。

図書館グループ

昨年同様、図書館、書店、取次の皆様のご協力を仰ぎながら、次の方針で活動します。まず第一に図書館界とのコミュニケーションです。とりわけ、一〇月二九、三〇日の両日、二〇年ぶりに東京で行なわれる図書館大会は、人文書、ならびに人文会を全国の図書館員にアピールする良い機会であると考えます。また、ホームページや人文会ニュースを活用した図書館への案内も従来通り継続したいと思います。そして第二に、書店外商や取次店を通しての図書館への販売促進です。昨年取り組み始めた高校図書館への図書案内や、大学・公共図書館の蔵書調査なども積極的に行なっていきます。

研修グループ

書店様、販売会社様とコミュニケーションすることによって販売の可能性を探ります。役割はこれに尽きると

考えます。また、書店様と行っている現行の企画を滞りなく継続させることも大事な事項であります。いずれにしても、「気軽に声を掛けられる」関係性を構築し、販売に結びつけたいと思います。

委員会メンバーは以下の通りです。

企画グループ　○華園　斉（創元社）
駒谷　光彦（大月書店）
江波戸　茂（日本評論社）
水谷　幹夫（未來社）

図書館グループ　○橋元　博樹（東京大学出版会）
成田　共助（法政大学出版局）
馬場　正彦（吉川弘文館）

研修グループ　◎田﨑　洋幸（みすず書房）
小倉　研二（白水社）
三橋　直也（紀伊國屋書店）

（◎委員長／○副委員長）

広報委員会

広報委員会委員長　吉武　創

昨期まで広報委員長として活躍された鎌内氏が代表幹事になられ、販売委員長として同じく活躍をされた浴野氏をホームページグループ長に迎えた今期の広報委員会は、人員に大きな異動がありますが、当委員会の経験者と新戦力がバランス良く配された委員会になっております。

今期も「人文会ニュース」と「ホームページ」を中心に人文会の広報活動をしていきます。

「人文会ニュース」については、人文書の販売・普及先である書店様や図書館様に対して、販売や棚作り・蔵書収集や蔵書チェックで役立つ記事を提供したいと考えております。

また「人文会ニュース」の記事ついては、ホームページグループと連絡をとりながら迅速に更新していきたいと思います。

現在、販売委員会で進めている人文書中ジャンル見直しについて、「人文会ニュース」では〈一五分で読むシリーズ〉で新しいジャンルやキーワードを取りあげます。ホームページでは、人文書中ジャンル見直しの進行にあわせ更新していきたいと思います。人文書新ジャンルについては、今期中に書名までリストアップしホームページで掲載する予定です。

ホームページについては「お知らせ」ページを順次更新し、新刊検索につきましても、各社の新刊がさらに充実する仕組みを考えており、各社の新刊情報を「人文会ニュース」にも掲載いたします。

来年人文会は創立四〇年周年を迎えるため、今期からその準備をしていきたいと思います。

昨期同様今期も、他の委員会・グループと連携をとりながら広報活動していきたいと考えております。

委員会のメンバーは次の通りです。

広報グループ　◎吉武　創（勁草書房）
高橋　千代（晶文社）
根井　浩一（平凡社）
三上　直樹（ミネルヴァ書房）

ホームページグループ〇浴野　英生（草思社）
小林　丈生（慶應義塾大学出版会）
戸田　浩（筑摩書房）

（◎委員長／〇副委員長）

二〇〇七年特約店グループ訪問報告

札幌・帯広方面

報告　新保卓夫（誠信書房）

●　期日　六月二七日（水）～六月二九日（金）

●　参加メンバー　佐藤（白水社）・華園（創元社）・吉武（勁草書房）・新保（誠信書房）

●訪問書店　紀伊國屋書店札幌本店・紀伊國屋書店札幌ロフト店・旭屋書店札幌店・三省堂書店大丸札幌店・リーブルなにわ・丸善札幌アリオ店・丸善ピヴォ店・コーチャンフォー美しが丘店・コーチャンフォーミュンヘン大橋店・コーチャンフォー新川通り店・北海道大学生協クラーク店・北海道大学生協北部店・札幌大学生協・帯広喜久屋書店／ザ・本屋さん・帯広市図書館（計一四店舗・一館）

●感想：相次ぐ大型店の出店ラッシュで各地の書店地図はここ数年で大きく様変わりした。なかでも札幌地区はその筆頭といえる。

二〇〇二年：旭屋書店ＪＲタワーに始まり、二〇〇三年：三省堂書店大丸札幌店、二〇〇四年：コーチャンフォーミュンヘン大橋店、二〇〇五年：紀伊國屋書店札幌本店、そして二〇〇六年：コーチャンフォー新川通店。さらには、二〇一〇年にジュンク堂書店が大通りに出店の予定とか……。

わが人文会でも、二〇〇三年には研修旅行で訪問するなど、ほぼ毎年のように同地区を訪れている。まさに目の離せない地区である。

書店分布図でいえば、駅周辺のナショナルチェーン三店輔（旭屋書店／三省堂書店／紀伊國屋書店）と郊外に

展開するコーチャンフォーの三店舗という構図に集約される。駅周辺では、紀伊國屋書店が質量とも一歩抜け出た観がある。コーチャンフォーの三店舗はそれぞれに特徴があり、商圏をうまく棲み分けているようだ。棚揃えや新刊書、平台の品揃えにやや物足りなさを感じるが、独特の建物と広いスペース、広い駐車場は読者を惹きつける魅力を持っている。

大通り地区の衰退は、全盛期を知る者にとって、寂しい限りではあるが、現在計画が進行中の〝地下鉄札幌駅から大通り駅までの地下通路〟が完成すれば、人の流れが変わることが予想される。

札幌から特急電車で約三時間。十勝支庁の中心都市、帯広市に到着。駅前の長崎屋内に今年四月に七五〇坪でオープンした喜久屋書店は、地元の書店「ザ・本屋さん」との提携による出店である。人口一七万の帯広市に出現した大型店に、読者もお店の担当者もまだ戸惑い気味といった印象である。棚揃えや棚の配置に課題を残しているが、スタッフの表情には熱意が感じられた。

また今回の帯広訪問では、「ザ・本屋さん」の高橋千尋社長の紹介で「帯広市図書館」（二〇〇六年三月オープン）を見学（休館日にもかかわらず）することができた。人文会でも図書館グループによる図書館見学の企画があるが、訪問機会の少ない地方都市の図書館をゆっくり見学し、館長（美人の）の説明を聞く機会を得たことは、大きな収穫であった。今後も機会があれば、こうした活動をグループ訪問に取り入れていく必要性を感じた。

最後に、毎度ながら慌しい我々一行の訪問にも、快く対応していただいた各書店の皆様方に心より御礼申し上げたい。

仙台・盛岡方面

報告者　江波戸　茂（日本評論社）

●期日　六月二九日（金）～六月三〇日（土）
●参加メンバー　平石（御茶の水書房）・根井（平凡社）成田（法政大学出版局）江波戸（日本評論社）
●訪問書店　東北大学生協文系店・ジュンク堂書店仙台店・ジュンク堂書店仙台ロフト店・丸善仙台アエル店・紀伊國屋書店仙台店・八文字屋書店泉店・さわや書店本店・東山堂書店本店・ジュンク堂書店盛岡店（計九店舗）

●感想：仙台地区は今年で三年連続の訪問となる。訪問した店舗に大きな変化は見られず、老舗の廃業は続くもの専門書の売上動向に限って言えば無風と言ってよい。ただ今冬オープンしたダイヤモンドシティ・エアリはイオンと三越の巨大複合施設なのだが、駅前・長町・泉の大型書店の雑誌・学参等に影響を与えている。

近未来的な変化について言えば、平成二八年の地下鉄東西線の開通と東北大キャンパスの移転計画が次の仙台書店地図の再編に繋がると予想される。東北大が散在する学部を統合できれば、生協は各店に分散されている力をひとつにできるかもしれない。また仙台駅と川内・青葉山を直接つなぐ地下鉄ができた時、これまで以上に東北大の専門書読者が駅に流れる事も考えられる。いずれにせよ先の話で恐縮だが、八年なんてあっという間に来る。

盛岡地区は昨年一二月にオープンしたジュンク堂書店の動向につきると思われるが、ジュンク堂出店が人口三〇万以下の県庁所在地であることは専門書世界での事件とも言える。ジュンク堂書店の売上は順調で、売上傾向を見ながら走り続けている印象だ。世帯あたりの書籍雑誌購買金額が六県中最も高い（二〇〇五）岩手の読者を魅了している。かたや老舗の東山堂書店は、すでにイオン盛岡南店がグループ一番店となり、本店は以前からの専門書顧客をイベントや外商活動を通じ繋ぎ止めようとしている。さわや書店専門書フロアでは、ジャンルを絞り必要なものを直ぐに探せる棚作りを進めている。伊藤店長の芸術的な販売手法は言うまでもなく、これからもファンを増やし続けると思う。

最後にお忙しい中いずれの書店様もご丁寧に対応して頂き感謝を申し上げると共に、今後の販売促進に繋げねばと気持をあらたにする次第である。

名古屋・豊橋・浜松方面

報告者　駒谷光彦（大月書店）

●期日　六月二八日（木）～六月二九日（金）

●参加メンバー　三橋（紀伊國屋書店）・鎌内（春秋社）浴野（草思社）・駒谷（大月書店）

●訪問書店　紀伊國屋書店名古屋名鉄店・ジュンク堂書店名古屋店・三省堂書店名古屋高島屋店・三省堂書店名古屋テルミナ店・丸善名古屋栄店・あおい書店名古屋本店・名古屋大学生協南部書籍店・ちくさ正文館書店・

精文館書店本店・谷島屋イオン浜松店・谷島屋連尺本店・谷島屋メイワン店（計一二店舗）

●感想：書店地図が変化し続ける名古屋地区。

名古屋駅前は再開発により、トヨタ本社をはじめオフィスや商店の超高層ビルが立ち並ぶも、今回訪問した駅前の書店では、売上げへの効果は期待したほどではないようです。お店からは一部改装や棚割の見直しを行なうという声が複数聞かれ、戦術の見直しを迫られているようです。また売上げという点では、街としての魅力が増したと思われる駅前地区でも、郊外店の影響は無視できなくなってきています。

そのような中、三省堂書店からは、名古屋だけでなくグループ全体としても、ここ数ヶ月人文書・理工書の前年比が良いというお話を伺い、勇気づけられました。

また、ジュンク堂書店は着実に読者に認知されてきているようです。

三月に開店したばかりの紀伊國屋書店名鉄店は心理・精神世界が好調です。

名古屋駅前に対して、大型書店の撤退が続いた栄地区。今回お会いできた丸善栄店とあおい書店本店では、撤退の影響もあり、人文書を含め専門書が好調とのことです。

栄地区では人文書の棚が減っていることもあり、両店には今後とも、ぜひ頑張っていただきたいところです。

定番に独自の品揃えで工夫する名古屋大生協では、学生への専門書販売の厳しさを改めて認識し、若い世代へのアプローチについて考えさせられました。

ちくさ正文館と精文館のすばらしい棚づくりには圧倒されました。

また、ちくさ正文館書店では谷口社長に、谷島屋では斉藤社長以下役員全員の皆様にお出迎えいただきました。ありがとうございました。

最後に今回は駆け足の訪問となりましたが、ご多忙のところ快くご対応いただきました各書店の皆様にあらためて御礼申し上げます。

広島・岡山方面

報告者　三上直樹（ミネルヴァ書房）

●期日　七月一九日（木）～七月二〇日（金）

●参加メンバー　橋元（東京大学出版会）・高橋（晶

文社）・水谷（未來社）・三上（ミネルヴァ書房）

●訪問書店　ジュンク堂広島店・リブロ広島店・紀伊國屋広島店・フタバ図書ＴＥＲＡ・フタバ図書ＭＥＧ・喜久屋倉敷店・丸善岡山シンフォニービル店・紀伊國屋クレド岡山店（計八店）

●感想：広島市は近年地方都市が郊外型に変貌していく中で、旧市街がまだ繁華街として頑張っている所である。しかし二年後の広島市民球場の移転（広島駅付近へ）、宇品にできる大型Ｓ・Ｃ（ゆめタウン：紀伊國屋書店が出店予定）などの計画があり、今後は郊外へ流れる人も多くなるだろう。こと人文書については、全部合わせれば供給過剰と言えるぐらいに豊富な品揃えの書店ばかりである。また、人文書の担当者が若く、やる気のある人達ばかりだったことには大変勇気づけられた。彼らが更に研鑽を積んでそれぞれの立地や個性にあった商品構成をしていけば今後かなり期待できる地域であることは間違いない。ただ、前記したように郊外進出を含めた競合や新規出店は一層激しさを増す様相なので、若い人が疲弊することが無いよう、また人材のいたずらな流出につながらないことを希望したい。

岡山は広島よりも郊外への人の流れが多い所である。喜久屋書店の入っている倉敷のＳ・Ｃなどは平日でも土日と見まがうばかりの繁盛ぶりである。特に倉敷は観光地なので必然的に地元の人は郊外へ出ていく構図になるのだろうか。多分、他にも出店予定地を探している書店があるだろうことは想像に難くない。倉敷に較べ、岡山市内中心部の書店はまだ専門書を買う読者の多くに支持されているようだった。しかし訪問の翌月にはフタバ図書が市郊外に出店することになっており、予断を許さない状況である。

専門書、人文書の読者を獲得するには立地、商品量はもちろん重要だが、今回の研修で再認識したことはそれに加えて雰囲気（静かに本を選べる空間とでもいうような）が必要だということだった。商品量があっても選ぶゆとりがそこになければ無意味である。今回の訪問店の中で客数の多少に関わらず、そうした雰囲気に欠ける書店があったのは少々残念だった。

佐賀・福岡・大分方面

報告者　馬場正彦（吉川弘文館）

●期日　七月二三日（月）～七月二五日（水）

●参加メンバー　小林（慶應義塾大学出版会）・戸田（筑摩書房）・田﨑（みすず書房）・馬場（吉川弘文館）

●訪問書店　紀伊國屋書店佐賀店・くまざわ書店佐賀店・紀伊國屋書店福岡本店・紀伊國屋書店ゆめタウン博多店・あおい書店博多本店・フタバ図書ＴＥＲＡ福岡東店・丸善福岡ビル店・ジュンク堂書店福岡店・九州大学生協文系購買書籍店・紀伊國屋書店大分店・明林堂書店大分本店・ジュンク堂書店大分店（計一二店舗）

●感想：ＪＲ博多駅では二〇一一年の九州新幹線博多乗り入れに伴い、新駅ビルの工事を行っていた。地下三階・地上一〇階建で延床面積二〇万平方メートルの大型施設で阪急百貨店の出店が決まっている。現時点ではバス網の利便性もあり、天神地区が商業地区としては優位に立っているが、名古屋や札幌のようにＪＲ駅ビルへの集中化が進む可能性もある。駅ビルに入店するはずの書店がどこになるのか気になるところだ。博多口にある紀伊國屋書店福岡本店にとっては建築工事現場にふさがれる形になって、入店する博多駅交通センターへのアクセスが悪くなっていたのが気の毒。官庁街でもある筑紫口のヨドバシカメラ内あおい書店博多本店はこれからの伸びに期待したい。

天神地区では、長く地元に親しまれていた紀伊國屋書店天神店の閉店に伴い、裏手にあるジュンク堂書店福岡店に読者が流れているようだった。アイテム数は九州地区においては圧倒的なので読者の信頼を勝ち得ている。丸善福岡ビル店は坪数的にはジュンク堂には及ばずとも、きちんと目配りした品揃えで安心できる。

紀伊國屋書店は九州地区において、ショッピングセンター「ゆめタウン」内への出店があいついでいる。今回は佐賀店、ゆめタウン博多店、大分店を訪問した。いずれも内装は綺麗だし、品揃えも上手にまとめあげているが、人文書についてはまだまだこれからという状態のようだ。その点、イオン内にある、くまざわ書店佐賀店が書評コーナーを常設して、人文書をそこからつなげていたり、福岡ダイヤモンドシティ内のフタバ図書ＴＥＲＡ福岡東店がエンド棚等でこまめにフェアを展開したりと読者にアピールする工夫をしており、硬い本は難しいと言われる郊外型ショッピングセンター内の書店での人文

書への取り組みが印象的だった。

今回、唯一の大学生協、九州大学生協文系店では、旧帝大にも関わらず人文専門書の販売が苦しくなっている状況を聞く。

大分では明林堂大分本店の充実に驚いた。ジュンク堂タイプのスラント棚に珍しい本も含め、ぎっしりと詰め込んでいる。この方法論の先駆者、ジュンク堂書店の大分店にとっても脅威だろう。

編集後記

「人文会ニュース」一〇二号をお届けします。

現在販売委員会ですすめている「人文書中ジャンルの見直し」に関連して盛山和夫先生に現代リベラリズムについて執筆していただきました。

静岡市立御幸町図書館の豊田館長には、「無料貸本屋」と批判されることもある公共図書館の新たな試みの紹介と、これからの役割について書いていただきました。

今回から巻末に人文会会員各社の新刊情報を掲載しております。棚や蔵書のチェックなどに御活用ください。

東京国際ブックフェアについては、本号で報告が掲載されている特約店グループ訪問で書店様から要望があり、星野さんに執筆を御依頼し実現いたしました。

東京国際ブックフェアについての記事のように、書店様・図書館様からの御意見・御要望を積極的に取り上げていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

（広報委員会）

人文会会員社　新刊のご案内

(2007. 8～2007. 10)

哲学・思想

書　　名	著　編　監　修　者	本体価格	ISBN	出　版　社　名
オックスフォード　科学の肖像　マリー・キュリー　新しい自然の力の発見	オーウェン・ギンガリッチ編集代表	1800	9784272440450	大　月　書　店
法のことば / 詩のことば	堅田　剛	4000	9784275005403	御茶の水書房
思想史と社会史の弁証法	川越修　植村邦彦　野村真理編	7600	9784275005489	御茶の水書房
フーコーの後で	芹沢一也・高桑和巳編	2000	9784766414042	慶應義塾大学出版会
時間と絶対と相対と	入不二基義	3100	9784326199174	勁　草　書　房
アブダクション	米盛裕二	2800	9784326153930	勁　草　書　房
心の哲学入門	金杉武司	2000	9784326153923	勁　草　書　房
心を自然化する	フレッド・ドレツキ著 / 鈴木貴之訳	3100	9784326199587	勁　草　書　房
四次元主義の哲学　持続と時間の存在論	セオドア・サイザー著 / 小山虎訳	3800	9784393323137	春　秋　社
死ぬのは法律違反です	荒川修作　マドリン・ギンズ　河本英夫訳	2400	9784393332733	春　秋　社
自由の条件Ⅰ　自由の価値　ハイエク全集第５巻	F. A. ハイエク著 / 気賀健三他訳	4000	9784393621752	春　秋　社
自由の条件Ⅱ　自由と法　ハイエク全集第６巻	F. A. ハイエク著 / 気賀健三他訳	4000	9784393621769	春　秋　社
日本語と日本語論	池上嘉彦	1300	9784480090904	筑　摩　書　房
論理的原子論の哲学	B. ラッセル	1100	9784480090966	筑　摩　書　房
動物と人間の世界認識　―イリュージョンなしに世界は見えない	日高敏隆	840	9784480090973	筑　摩　書　房
脳がほぐれる言語学　―発想の極意	金川欣二	700	9784480063755	筑　摩　書　房
翔太と猫のインサイトの夏休み　―哲学的諸問題へのいざない	永井　均	880	9784480090928	筑　摩　書　房
ミシェル・フーコー講義集成　6	ミシェル・フーコー	4800	9784480790460	筑　摩　書　房
アントニオ・ネグリ講演集　上　〈帝国〉とその彼方	ネグリ	880	9784480090942	筑　摩　書　房

書　　名	著　編　監　修　者	本体価格	ISBN	出　版　社　名
アントニオ・ネグリ講演集　下　〈帝国〉的ポスト近代の政治哲学	ネグリ	880	9784480090959	筑　摩　書　房
ポストヒューマンの人間論	ニクラス・ルーマン	3800	9784130101059	東京大学出版会
残響の中国哲学	中島隆博	4800	9784130101042	東京大学出版会
近代日本の思想家1　福沢諭吉	遠山茂樹	2800	9784130141512	東京大学出版会
近代日本の思想家2　中江兆民	土方和雄	2800	9784130141529	東京大学出版会
近代日本の思想家3　片山　潜	隅谷三喜男	2800	9784130141536	東京大学出版会
近代日本の思想家4　森　鷗外	生松敬三	2800	9784130141543	東京大学出版会
近代日本の思想家5　夏目漱石	瀬沼茂樹	2800	9784130141550	東京大学出版会
近代日本の思想家6　北村透谷	色川大吉	2800	9784130141567	東京大学出版会
近代日本の思想家7　西田幾多郎	竹内良知	2800	9784130141574	東京大学出版会
近代日本の思想家8　河上　肇	古田　光	2800	9784130141581	東京大学出版会
近代日本の思想家9　三木　清	宮川　透	2800	9784130141598	東京大学出版会
近代日本の思想家10　戸坂　潤	平林康之	2800	9784130141604	東京大学出版会
中国思想史	溝口雄三	2500	9784130120562	東京大学出版会
法思想史講義　上　古典古代から宗教改革期まで	笹倉秀夫	3600	9784130323406	東京大学出版会
法思想史講義　下　絶対王政期から現代まで	笹倉秀夫	3800	9784130323413	東京大学出版会
哲学者たり、理学者たり　物理学者のいた街	太田浩一	2500	9784130636025	東京大学出版会
鏡の中の日本と中国	加々美光行	2000	9784535585058	日　本　評　論　社
ランシエール　現代の哲学を読む5	市田良彦	2600	9784560024553	白　　水　　社
馮友蘭自伝1　中国現代哲学者の回想	吾妻重二訳注	3000	9784582807677	平　　凡　　社
哲学の始まり—初期ギリシャ哲学講義—	ハンス＝ゲオルグ・ガダマー／箕浦恵了・國嶋貴美子訳	2300	9784588008726	法政大学出版局
したこととすべきこと〈迷宮の岐路V〉	コルネリュウス・カストリアディス／江口幹訳	4700	9784588008740	法政大学出版局
崇高の哲学	牧野英二	2600	9784588100093	法政大学出版局
『存在と時間』講義—統合的解釈の試み—	ジャン・グレーシュ／杉村靖彦他訳	12000	9784588150494	法政大学出版局
土星の徴しの下に	スーザン・ソンタグ	3300	9784622073239	み　す　ず　書　房
歴史哲学についての異端的論考	ヤン・パトチカ	4600	9784622073260	み　す　ず　書　房

書　　名	著編監修者	本体価格	ISBN	出版社名
食卓作法の起源　神話論理　Ⅲ	クロード・レヴィ＝ストロース	8600	9784622081531	みすず書房
人間とはなにか	カール・フォン・ヴァイツゼッカー著／小杉尅次ほか訳	4000	9784623049882	ミネルヴァ書房
例外状態	ジョルジョ・アガンベン	2000	9784624011758	未來社

心　理

心をケアする絵本　①どうして　そんなに　かなしいの？　親がうつ病になったとき	ベス・アンドリューズ作	1600	9784272406111	大月書店
仕事で燃えつきないために　対人援助職のメンタルヘルスケア	水澤都加佐（みずさわ　つかさ）著	1450	9784272420117	大月書店
生きる力　<いのちの柱>を取り戻せ	丸橋　賢	1600	9784314010269	紀伊國屋書店
拒食症・過食症を対人関係療法で治す	水島広子	1600	9784314010337	紀伊國屋書店
組織不正の心理学	蘭千壽編著	2200	9784766413885	慶應義塾大学出版会
参加観察の方法論	台　利夫	3800	9784766414080	慶應義塾大学出版会
心理療法とスピリチュアルな癒し	實川幹朗	2800	9784393364826	春秋社
ハーブ・セラピー　ＣＤ付	ステラ・ベンソン著／神藤雅子訳	2800	9784393364932	春秋社
がんのＳＡＴ療法	宗像恒次　小林啓一郎	1800	9784393716205	春秋社
音楽する人間　ＤＶＤ付	クライブ・ロビンズ著／生野里花訳	3200	9784393934975	春秋社
アレクサンダー・テクニーク	小野ひとみ	1600	9784393935026	春秋社
影響力の武器［第二版］	ロバート・B.チャルディーニ著／社会行動研究会訳	2800	9784414304169	誠信書房
インタビュー臨床心理士１	津川律子・安齊順子編	1500	9784414400366	誠信書房
インタビュー臨床心理士２	津川律子・安齊順子編	1500	9784414400373	誠信書房
新・臨床心理士になるために［平成19年版］	（財）日本臨床心理士資格認定協会監修	1400	9784414400380	誠信書房
新編　感覚・知覚心理学ハンドブック　Part 2	大山正・今井省吾・和氣典二・菊地正編	18000	9784414305043	誠信書房
森田療法と精神分析的精神療法	北西憲二・皆川邦直・三宅由子・長山恵一・豊原利樹・橋本和幸著	5800	9784414400342	誠信書房
動作のこころ　臨床ケースに学ぶ	成瀬悟策編	3000	9784414400359	誠信書房
セラピストは夢をどうとらえるか	川嵜克哲編著	4300	9784414400397	誠信書房

書　　名	著　編　監　修　者	本体価格	ISBN	出　版　社　名
交流分析による人格適応論	V. ジョインズ・I. スチュアート / 白井幸子・繁田千恵監訳	5800	9784414414264	誠　信　書　房
被害者－加害者調停ハンドブック	マーク・S. アンブライト / 藤岡淳子訳	4300	9784414414271	誠　信　書　房
メラニー・クライン	ジュリア・スィーガル / 祖父江典人訳	2600	9784414414288	誠　信　書　房
ＡＰＡ倫理規準による　心理学倫理問題事例集	トマス・F. ネイギー著 / 村本詔司監訳	4800	9784422112978	創　元　社
インスー・キム・バーグのブリーフコーチング入門	インスー・キム・バーグ　ピーター・ザボ著 / 長谷川啓三監訳	2800	9784422113975	創　元　社
タッチングと心理療法　―ダンスセラピーの可能性	崎山ゆかり著	2000	9784422113982	創　元　社
教育分析の実際　―家族関係を問い直す男性の事例	東山紘久著	3300	9784422113999	創　元　社
夢分析の世界　―四つの症状をもつ女性の事例	東山紘久著	3000	9784422114002	創　元　社
臨床におけるナルシシズム	N. シミントン / 成田善弘監訳	3000	9784422114019	創　元　社
ゲシュタルト・セラピーの手引き	サージ・ジンジャー	2500	9784422114026	創　元　社
うちの親には困ったものだ	バーバラ・ケイン他	1500	9784794216397	草　思　社
ストレスに負けない生活　―心・身体・脳のセルフケア	熊野宏昭	680	9784480063762	筑　摩　書　房
分裂病と他者	木村　敏	1500	9784480090898	筑　摩　書　房
事故と安全の心理学　リスクとヒューマンエラー	事故と安全の心理学　リスクとヒューマンエラー新刊	3200	9784130111218	東京大学出版会
音楽と認知	波多野誼余夫編	2400	9784130151580	東京大学出版会
認知科学の方法	佐伯　胖	2400	9784130151511	東京大学出版会
臨床心理のコラボレーション	藤川　麗	4500	9784130161121	東京大学出版会
比喩と理解	山梨正明	2400	9784130151559	東京大学出版会
理解とは何か	佐伯胖編	2400	9784130151528	東京大学出版会
精神科臨床ノート	青木省三	2000	9784535804166	日　本　評　論　社
躁うつ病はここまでわかった	加藤忠史	1600	9784535982734	日　本　評　論　社
不安障害臨床マニュアル	ダン・コ・スタイン	2800	9784535982772	日　本　評　論　社
精神科のくすりを語ろう	熊木徹夫	1800	9784535982697	日　本　評　論　社

書　　名	著編監修者	本体価格	ISBN	出版社名
パーソナリティ障害とむきあう	林　直樹	2000	9784535562479	日本評論社
統合的心理臨床への招待	村瀬嘉代子監修	3000	9784623047406	ミネルヴァ書房
アタッチメントと臨床領域	数井みゆき／遠藤利彦編	3500	9784623049202	ミネルヴァ書房
内観療法	三木善彦ほか編	3000	9784623049783	ミネルヴァ書房

宗　　教

なぜ仏教で人は救われるのか	高崎直道・ひろさちや	1600	9784393112557	春秋社
こころの妙薬	岡山隣子	1500	9784393133590	春秋社
観音力	中村文峰	1200	9784393142738	春秋社
風の記憶　ヒマラヤの谷に生きる人々	貞兼綾子	2800	9784393191071	春秋社
キリスト教　シリーズ　21世紀をひらく世界の宗教	ブライアン・ウィルソン著／田口博子訳	2000	9784393203125	春秋社
すべての望みを引き寄せる法則	ブレンダ	1600	9784393364925	春秋社
太極拳をはじめませんか　DVD付	吉田勝彦・王茂斌	2200	9784393970416	春秋社
神の探求　―現代のニヒリズム・科学文明・宗教紛争の世界の中で	松木真一編著	1800	9784422143811	創元社
死海文書入門	ジャン＝バティスト・アンベール　エステル・ヴィルヌーブ著／秦剛平監修／遠藤ゆかり訳	1500	9784422211947	創元社
病をよせつけない心と身体をつくる	クリステル・ナニ	1400	9784794216243	草思社
多田等観全文集　チベット仏教と文化	多田等観	6200	9784560030479	白水社
喪失とノスタルジア　近代日本の余白へ	磯前順一	3800	9784622072744	みすず書房
堀一郎著作集第2巻　宗教と社会変動	堀一郎著／楠正弘編	16000	9784624904029	未來社
増補　大神宮叢書　13　神宮年中行事大成　前編	神宮司庁蔵版	10000	9784642003933	吉川弘文館

歴　　史

中国国民政府期の華北政治	光田　剛	6600	9784275005410	御茶の水書房
巨大建築という欲望　権力者と建築家の20世紀	ディヤン・スジック	3800	9784314010313	紀伊國屋書店

書　　名	著編監修者	本体価格	ISBN	出版社名
慶應義塾大学法学研究会叢書76　西洋における近代的自由の起源	R.W.デイヴィス	7100	9784766413977	慶應義塾大学出版会
近世京都の歴史人口学的研究	浜野　潔	3800	9784766414011	慶應義塾大学出版会
近世・近現代考古学入門	鈴木公雄	2800	9784766414134	慶應義塾大学出版会
叢書　21COE－CCC　多文化世界における市民意識の動態23　近代日本の政治意識	笠原英彦	3800	9784766414158	慶應義塾大学出版会
東アジアの近代と日本	鈴木正崇編	2000	9784766414189	慶應義塾大学出版会
慰安婦問題という問い	大沼保昭・岸俊光編	2800	9784326248391	勁草書房
アルファベットの事典	ローラン・プリューゴープト著／南條郁子訳	2400	9784422202365	創元社
ヨーロッパ古城物語	ジャン・メスキ／堀越孝一監修	1500	9784422211954	創元社
奈良名所むかし案内　―絵とき「大和名所図会」	本渡章著	1800	9784422250496	創元社
昭和の日本のすまい	NPO西山夘三記念すまい・まちづくり文庫　編集代表松本滋	4700	9784422501185	創元社
いつまでも、いつまでもお元気で	知覧特攻平和会館	1000	9784794216205	草思社
信長は本当に天才だったのか	工藤建策	1600	9784794216267	草思社
再現　南京戦	東中野修道	1800	9784794216168	草思社
高松塚への道	網干善教	1700	9784794216359	草思社
人類の足跡10万年全史	スティーヴン・オッペンハイマー	2400	9784794216250	草思社
自分のなかに歴史をよむ	阿部謹也	600	9784480423726	筑摩書房
日本の百年3　強国をめざして　1889―1900	松本三之介	1500	9784480090737	筑摩書房
明治風物誌	柴田宵曲	1300	9784480090911	筑摩書房
ヒトラー暗殺	ロジャー・ムーアハウス	3200	9784560026267	白水社
救世観音像　封印の謎	倉西裕子	2400	9784560031704	白水社
近代日本と小笠原諸島	石原俊著	5000	9784582428025	平凡社
日本の怨霊	大森亮尚著	2400	9784582466027	平凡社
日本語の歴史6　新しい国語への歩み	亀井孝・大藤時彦・山田俊雄＝編集委員	1300	9784582766233	平凡社
中国とインドの諸情報1	家島彦一訳注	2700	9784582807660	平凡社
考古学の教室	菊池徹夫著	740	9784582853872	平凡社

書　　名	著　編　監　修　者	本体価格	ISBN	出　版　社　名
秘密結社の日本史	海野弘著	780	9784582853896	平　凡　社
〈負け組〉の戦国史	鈴木眞哉著	760	9784582853919	平　凡　社
東大生はどんな本を読んできたか	永嶺重敏著	820	9784582853940	平　凡　社
敗北の文化　敗戦トラウマ・回復・再生	ヴォルフガング・シヴェルブシュ／福本義憲・高本教之・白木和美訳	5000	9784588008696	法政大学出版局
チュルゴーの失脚　上―1776年5月12日のドラマ―	エドガール・フォール／渡辺恭彦訳	6500	9784588008702	法政大学出版局
チュルゴーの失脚　下―1776年5月12日のドラマ―	エドガール・フォール／渡辺恭彦訳	5500	9784588008719	法政大学出版局
河岸（かし）	川名　登	2800	9784588213915	法政大学出版局
神　饌（しんせん）神と人との饗宴	岩井宏實著	3300	9784588214011	法政大学出版局
駕籠（かご）	櫻井芳昭著	2800	9784588214110	法政大学出版局
関東水陸交通史の研究	丹治健蔵著	10000	9784588250538	法政大学出版局
プランテーションの社会史　デリ／1870－1979	アン・ローラ・ストーラー／中島成久訳	6800	9784588377044	法政大学出版局
ロンドン海軍条約成立史	関　静雄	7500	9784623049196	ミネルヴァ書房
橋本関雪	西原大輔著	2800	9784623049974	ミネルヴァ書房
李方子	小田部雄次	2800	9784623049776	ミネルヴァ書房
「白バラ」尋問調書――『白バラの祈り』資料集	フレート・ブライナースドルファー著	3200	9784624111960	未　來　社
誰でも読める日本中世史年表	吉川弘文館編集部編	4800	9784642014397	吉川弘文館
飛鳥藤原京木簡　一（別冊解説付）	奈良文化財研究所編集・発行	18000	9784642019712	吉川弘文館
古代の天文異変と史書	細井浩志著	11500	9784642024624	吉川弘文館
永原慶二著作選集　第2巻　日本封建制成立過程の研究	永原慶二著	15000	9784642026819	吉川弘文館
永原慶二著作選集　第3巻　日本中世社会構造の研究	永原慶二著	16000	9784642026826	吉川弘文館
永原慶二著作選集　第4巻　荘園　荘園制と中世村落	永原慶二著	17000	9784642026833	吉川弘文館
現代語訳　吾妻鏡　1	五味文彦・本郷和人編	2200	9784642027083	吉川弘文館
初期室町幕府訴訟制度の研究	岩元修一著	9500	9784642028684	吉川弘文館

書　　名	著　編　監　修　者	本体価格	ISBN	出　版　社　名
近世の遊行聖と木食観正	西海賢二著	17500	9784642034234	吉　川　弘　文　館
近世医療の社会史	海原亮著	10000	9784642034241	吉　川　弘　文　館
戦後日米関係と安全保障	我部政明著	8000	9784642037792	吉　川　弘　文　館
沼津兵学校の研究	樋口雄彦著	26000	9784642037808	吉　川　弘　文　館
人物叢書 248　菅江真澄	菊池勇夫著	2100	9784642052412	吉　川　弘　文　館
歴史文化ライブラリー 238　団塊世代の同時代史	天沼香著	1700	9784642056380	吉　川　弘　文　館
歴史文化ライブラリー 239　江戸城が消えていく	千葉正樹著	1800	9784642056397	吉　川　弘　文　館
歴史文化ライブラリー 240　信長のおもてなし	江後迪子著	1700	9784642056403	吉　川　弘　文　館
歴史文化ライブラリー 241　昭和を騒がせた漢字たち	円満字二郎著	1700	9784642056410	吉　川　弘　文　館
歴史文化ライブラリー 242　古代の皇位継承	遠山美都男著	1700	9784642056427	吉　川　弘　文　館
歴史文化ライブラリー 243　上野寛永寺　将軍家の葬儀	浦井正明著	1700	9784642056434	吉　川　弘　文　館
戦争の日本史 8　南北朝の動乱	森茂暁著	2500	9784642063180	吉　川　弘　文　館
戦争の日本史 14　一向一揆と石山合戦	神田千里著	2500	9784642063241	吉　川　弘　文　館
戦争の日本史 17　関ヶ原合戦と大坂の陣	笠谷和比古著	2500	9784642063272	吉　川　弘　文　館
歴史文化セレクション　江戸の禁書	今田洋三著	1700	9784642063388	吉　川　弘　文　館
歴史文化セレクション　田村麻呂と阿弓流為	新野直吉著	1800	9784642063401	吉　川　弘　文　館
戦後教育のなかの〈国民〉	小国喜弘著	2600	9784642079792	吉　川　弘　文　館
鉄砲伝来の日本史	宇田川武久編	2900	9784642079808	吉　川　弘　文　館
歴史研究の最前線　史料の新しい可能性を探る	国立歴史民俗博物館総合研究大学院大学・高橋一樹編	900	9784642079815	吉　川　弘　文　館
北方伝説の誕生	佐々木馨著	2800	9784642079822	吉　川　弘　文　館
古文書研究　第 64 号	日本古文書学会編	3500	9784642087605	吉　川　弘　文　館
鎌倉遺文研究　第 20 号	鎌倉遺文研究会編	1900	9784642090001	吉　川　弘　文　館
日本考古学　第 24 号	日本考古学協会編	4000	9784642090995	吉　川　弘　文　館
戦国史研究　第 54 号	戦国史研究会編	667	9784642092227	吉　川　弘　文　館
観世音寺（全 5 冊セット）	九州歴史資料館編集・発行	70000	9784642093095	吉　川　弘　文　館

社　会

書　名	著編監修者	本体価格	ISBN	出版社名
きみは地球だ　デヴィッド・スズキ博士の環境科学入門	デヴィッド・スズキ著	1600	9784272330515	大月書店
小川政亮著作集（全８巻）	小川政亮著作集編集委員会編	36000	9784272301706	大月書店
格差国家アメリカ　広がる貧困・つのる不平等	大塚秀之著	1800	9784272230198	大月書店
格差社会から成熟社会へ	碓井敏正・大西広編	2500	9784272210961	大月書店
グローバリゼーションと世界の農業	中野一新・岡田知弘編	3000	9784272140558	大月書店
知られざる宇宙　海の中のタイムトラベル	フランク・シェッツィング著	3800	9784272440368	大月書店
科学技術とリスクの社会学	小島　剛	6800	9784275005441	御茶の水書房
21COE－CCC　多文化世界における市民意識の動態24　異文化接触から見る市民意識とエスニシティの動態	石井香世子	3600	9784766414165	慶應義塾大学出版会
失われた民主主義	シーダ・スコッチポル	2800	9784766414196	慶應義塾大学出版会
国際電気通信市場における制度形成と変化	西岡洋子	4500	9784766414257	慶應義塾大学出版会
セラピー文化の社会学	小池　靖	2200	9784326653294	勁草書房
大学生の就職とキャリア	小杉礼子編	2200	9784326653300	勁草書房
結婚式教会の誕生	五十嵐太郎	1900	9784393332696	春秋社
プライドワーク　自分をつくる働き方	今　一生	1800	9784393495285	春秋社
アルツハイマーのための新しいケア	J.コーニグ・コステ／阿保順子監訳	2400	9784414604054	誠信書房
中国･ロシア同盟がアメリカを滅ぼす日	北野幸伯	1500	9784794216373	草思社
地図で読む世界情勢　第２部これから世界はどうなるか	ジャン－クリストフ・ヴィクトル他	1500	9784794216106	草思社
秋田連続児童殺害事件	黒木昭雄	1300	9784794216465	草思社
いのちと放射能	柳澤桂子	560	9784480423603	筑摩書房
はじまりは大阪にあり	井上理律子	840	9784480423634	筑摩書房
ルポ最底辺　―不安定就労と野宿	生田武志	740	9784480063779	筑摩書房
人を動かす情報術	春木良且	740	9784480063786	筑摩書房
柳田國男集　文豪怪談傑作集	柳田國男	880	9784480423597	筑摩書房

書　　名	著　編　監　修　者	本体価格	ISBN	出　版　社　名
湖のそばで暮らす　―大地に教えてもらったこと	M.ウィルキンス	700	9784480423610	筑　摩　書　房
民主主義という不思議な仕組み	佐々木毅	760	9784480687654	筑　摩　書　房
自然を感じるこころ　―ネイチャーライティング入門	野田研一	720	9784480687661	筑　摩　書　房
現代日本の死と葬儀	山田慎也	5200	9784130104081	東京大学出版会
デジタルは「国民＝国家」を溶かす	鈴木健二	2400	9784535585027	日　本　評　論　社
フードマイレージ	中田哲也	1800	9784535583740	日　本　評　論　社
ガイドブック社会調査　第2版	森岡清志	2900	9784535582460	日　本　評　論　社
澁澤敬三先生と私　アチック・ミューゼアムの日々	拵嘉一郎著	4000	9784582406177	平　　凡　　社
通訳者と戦後日米外交	鳥飼玖美子	3800	9784622073093	み　す　ず　書　房
法という現象	土方　透	2600	9784623048991	ミネルヴァ書房
ポスト韓流のメディア社会学	石田佐恵子・木村幹・山中千恵編著	4000	9784623048687	ミネルヴァ書房
スクールソーシャルワークの可能性	山野則子・峯本耕治編	2000	9784623049554	ミネルヴァ書房
環境社会学	ジョン・A.ハニガン著／松野弘監訳	5000	9784623049660	ミネルヴァ書房
福祉労働とキャリア形成	染谷俶子編	2800	9784623049677	ミネルヴァ書房
生活経済からみる福祉	馬場康彦著	3400	9784623049721	ミネルヴァ書房
ソーシャルワークにおけるアドボカシー	小西加保留著	6800	9784623049738	ミネルヴァ書房
ゲーム理論で読み解く現代日本	鈴木正仁	2800	9784623049745	ミネルヴァ書房
都市的なるものの社会学	大谷信介	2500	9784623049806	ミネルヴァ書房
協働と参加の地域福祉計画	牧里毎治・野口定久編	3400	9784623049851	ミネルヴァ書房
社会福祉専門職の研究	秋山智久著	4000	9784623049929	ミネルヴァ書房
ヴェーバー社会理論のダイナミクス―「諒解」概念による『経済と社会』の再検討	松井克浩	3500	9784624400606	未　　來　　社
歴史文化セレクション　柳田国男の民俗学	福田アジオ著	2200	9784642063395	吉　川　弘　文　館

教　育

書　名	著編監修者	本体価格	ISBN	出版社名
月刊　クレスコ11月号（no.80）　特集＝「特別支援教育」元年	クレスコ編集委員会・全教編	476	9784272792801	大月書店
教育管理職人事と教育政治　だれが校長人事を決めてきたのか	荒井文昭著	7000	9784272411887	大月書店
くらべてわかる食品図鑑　③米とこく類	家庭科教育研究者連盟編著	1800	9784272406036	大月書店
月刊　クレスコ10月号（no.79）　特集＝いま、なぜ「家庭教育」重視？	クレスコ編集委員会・全教編	476	9784272792795	大月書店
孫にうけるあそびとおもちゃ	菅原道彦（すがわら　みちひこ）著	1300	9784272411870	大月書店
月刊　クレスコ9月号（no.78）　特集＝「戦後レジームからの脱却」が描く教育とは	クレスコ編集委員会・全教編	476	9784272792788	大月書店
肢体不自由教育の基本とその展開	日本肢体不自由教育研究会	2200	9784766414097	慶應義塾大学出版会
学術情報流通とオープンアクセス	倉田敬子	2600	9784326000326	勁草書房
経験のメタモルフォーゼ	高橋勝	2500	9784326298815	勁草書房
美術のちから　教育のかたち	上野浩道	2200	9784393332757	春秋社
子どもにできる応急手当	カレン・ブーラー・ゲイル	1900	9784794926722	晶文社
12歳までに「絶対学力」を育てる学習法	糸山泰造	1200	9784794216274	草思社
大人は愉しい	内田　樹	700	9784480423559	筑摩書房
発達に遅れのある子の親になる2	海津敦子	1400	9784535562561	日本評論社
教育改革の国際比較	大桃敏行他編	4200	9784623049752	ミネルヴァ書房
子どもの「手」を育てる	子どもの遊びと手の労働研究会	2000	9784623049608	ミネルヴァ書房

批評・評論

異議申し立てとしての文学	西山雄二	6200	9784275005397	御茶の水書房
情緒論　セカイをそのまま見るということ	切通理作	1700	9784393332641	春秋社
新・俳人名言集	復本一郎	1700	9784393434383	春秋社
踊る身体のディスクール	譲原晶子	2800	9784393436295	春秋社

書　　名	著　編　監　修　者	本体価格	ISBN	出　版　社　名
異邦の記憶	イ・ヨンスク	2500	9784794967152	晶　文　社
「三十歳までなんか生きるな」と思っていた	保坂和志	1400	9784794216427	草　思　社
努力論	斎藤兆史	680	9784480063717	筑　摩　書　房
戦後少女マンガ史	米沢嘉博	880	9784480423580	筑　摩　書　房
もったいない話です	赤瀬川原平	1400	9784480816559	筑　摩　書　房
香港・日本映画交流史	邱淑ティン	6800	9784130860369	東京大学出版会
文字の都市　世界の文学・文化の現在10講	柴田元幸編著	2800	9784130800204	東京大学出版会
「沖縄」に生きる思想——岡本恵徳批評集	岡本恵徳	2600	9784624111984	未　來　社
木下順二対話集　ドラマの根源	木下順二ほか著	2800	9784624700898	未　來　社

人文会会員名簿

〒101-0021 千代田区外神田 2-18-6　春秋社内　　2007 年 12 月末現在

社名	担当者	〒	住所	電話	FAX
大月書店	駒谷 光彦	113-0033	文京区本郷 2-11-9	3813-4651	3813-4656
御茶の水書房	平石 修	113-0033	文京区本郷 5-30-20	5684-0751	5684-0753
紀伊國屋書店	三橋 直也	213-8506	川崎市高津区久本 3-5-7 新溝ノ口ビル 2F	044-874-9657	044-829-1128
慶應義塾大学出版会	小林 丈生	108-8346	港区三田 2-19-30	3451-6926	3451-3124
勁草書房	吉武 創	112-0005	文京区水道 2-1-1	3814-6861	3814-6854
春秋社	鎌内 宣行	101-0021	千代田区外神田 2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶文社	高橋 千代	101-0021	千代田区外神田 2-1-12	3255-4501	3255-4506
誠信書房	新保 卓夫	112-0012	文京区大塚 3-20-6	3946-5666	3945-8880
創元社	華園 斉	162-0825	新宿区神楽坂 4-3 煉瓦塔ビル	3269-1051	5229-7139
草思社	浴野 英生	151-0051	渋谷区千駄ヶ谷 2-33-8	3470-6565	3470-2640
筑摩書房	戸田 浩	111-8755	台東区蔵前 2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	橋元 博樹	113-8654	文京区本郷 7-3-1	3811-8814	3812-6958
日本評論社	江波戸 茂	170-8474	豊島区南大塚 3-12-4	3987-8621	3987-8590
白水社	小倉 研二	101-0052	千代田区神田小川町 3-24	3291-7811	3291-8448
平凡社	根井 浩一	112-0001	文京区白山 2-29-4 (泉白山ビル)	3818-0874	3818-0674
法政大学出版局	成田 共助	102-0073	千代田区九段北 3-2-7	5214-5540	5214-5542
みすず書房	田崎 洋幸	113-0033	文京区本郷 5-32-21	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	三上 直樹	101-0054	千代田区神田錦町 3-6 石沢ビル 3F	3296-1615	3296-1620
未來社	水谷 幹夫	112-0002	文京区小石川 3-7-2	3814-5521	3814-8600
吉川弘文館	馬場 正彦	113-0033	文京区本郷 7-2-8	3813-9151	3812-3544

会長	菊池明郎（筑摩書房）
代表幹事	鎌内宣行
会計幹事	平石 修
書記幹事	新保卓夫

（◎委員長　○副委員長）

販売委員会	・企画グループ	○華園 斉・江波戸茂・駒谷光彦・水谷幹夫
	・研修グループ	◎田崎洋幸・小倉研二・三橋直也
	・図書館グループ	○橋元博樹・成田共助・馬場正彦
広報委員会	・広報グループ	◎吉武 創・三上直樹・高橋千代・根井浩一
	・ホームページグループ	○浴野英生・小林丈生・戸田 浩

エトガー・ヴィントの本

シンボルの修辞学

秋庭史典、加藤哲弘、金沢百枝、鳴川順子、松枝伸治 訳

シンボルの歴史的由来を手がかりにして図像の宇宙を解く……。待望の翻訳。 ●5040円

オンデマンド選書

ルネサンスの異教秘儀

田中英道、藤田博、加藤雅之 訳 ●9765円

イ・ヨンスク

異邦の記憶

——故郷・国家・自由

『「国語」という思想』（サントリー学芸賞）以来、11年の思考を集成した渾身の文学・政治論。 ●2625円

晶文社 東京都千代田区外神田 2-1-12
TEL 03-3255-4501（価格は税込）
http://www.shobunsha.co.jp/

小杉礼子 編

大学生の就職とキャリア

「普通」の就活・個別の支援

職業人の育成で大学教育が果たす役割とその課題を論じる。 2310円

フレッド・ドレツキ／鈴木貴之 訳

心を自然化する

ジャン・ニコ講義セレクション2

自然主義的な世界観の中に、クオリアをどう位置づけるか。 3255円

＊価格税込

勁草書房（けいそう） TEL 03-3814-6861
FAX 03-3814-6854

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1
http://www.keisoshobo.co.jp

全米ベストセラーの心理学書！

影響力の武器

なぜ，人は動かされるのか

［第二版］

R.B.チャルディーニ著／社会行動研究会訳

訪問販売や怪しげな宗教の寄付などで苦い思いを味わった著者は，セールスマンの世界に潜り込み，六つの重要な原理を発見する。物を買わせる側が仕掛ける戦略をユーモラスに描いた話題作。2940円

新・臨床心理士になるために［平成19年版］

（財）日本臨床心理士資格認定協会監修

今年度より大幅刷新し，平成18年度の筆記試験問題（抜粋）に正答と解説を付す。1470円

誠信書房 東京都文京区大塚3-20-6
TEL.03-3946-5666〈税込〉

情緒論

セカイをそのまま見るということ

切通理作

川端康成から映画、アニメ、ギャルゲーまで縦横に探索しつつ、現代日本人の微妙な心性を描きだす。 1785円

◆茂木健一郎氏／枡野浩一氏推薦

「結婚式教会」の誕生

各紙誌絶賛！

●五十嵐太郎 信者なきウェディングチャペルとは。歴史、宗教、結婚式産業を俯瞰する建築文化論。 1995円

春秋社 東京都千代田区外神田2-18-6
☎03-3255-9611（価格は税込）
http://www.shunjusha.co.jp/

フーコーの思考展開の軌跡を明かす伝説の名講義、待望の日本版、全13巻!!

ミシェル・フーコー講義集成 全13巻

好評発売中

Ⅳ 精神医学の権力(1973-74) 6090円
Ⅴ 異常者たち(1974-75) 5040円
Ⅵ 社会は防衛しなければならない(1975-76) 5040円
Ⅶ 安全・領土・人口(1977-78) 6825円
Ⅺ 主体の解釈学(1981-82) 6720円

サービスセンター 筑摩書房 048-651-0053
＊税込 http://www.chikumashobo.co.jp/

創元社

13歳からの「人を動かす」 人に好かれる女の子になる8つのルール
世界的ロングセラー『人を動かす』の著者の娘が悩めるティーンに贈る珠玉の対人関係アドバイス。ドナ・カーネギー著／山岡朋子訳 1,365円

APA倫理規準による心理学倫理問題事例集
裁判になるのはどういうケースか。豊富な事例であらゆるタイプの倫理問題の対処法を提示。
T・F・ネイギー著／村本詔司監訳 5,040円

知の再発見双書134 **死海文書入門**
洞穴で発見された巻物から浮かび上がるユダヤ教徒と聖書の謎。豊富な図版で歴史的大事件の全貌に迫る格好の案内書。秦剛平監修 1,575円

BOOKMAP 関西図書館あんない
ユニークな蔵書をもつ専門図書館から大学・公共図書館まで網羅。全615館オール地図付。1,260円

〈本社〉大阪市中央区淡路町4-3-6 〈税込価〉
Tel. 06-6231-9010 Fax. 06-6233-3111
〈支店〉東京都新宿区神楽坂4-3 Tel. 03-3269-1051
http://www.sogensha.co.jp/

斎藤兆史
翻訳の作法 2310円
英文学の作品に即し、翻訳をトレーニングできる入門テキスト!

笹倉秀夫
法思想史講義
〈上〉古典古代から宗教改革期まで 3780円
〈下〉絶対王政期から現代まで 3990円
悠久の西洋法思想を大胆に描き切る決定版テキスト、いよいよ完結。

太田浩一
物理学者のいた街
哲学者たり、理学者たり 2625円
不朽の業績を残した物理学者たちの生涯を、いきいきと綴った珠玉のエッセイ集。

東京大学出版会
〒113-6654 東京都文京区本郷7-3-1 東大構内 [価格税込]
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958 http://www.utp.or.jp/

8万5000年前、人類の歴史は大きく動いた!

人類の足跡10万年全史

スティーヴン・オッペンハイマー／仲村明子訳
アフリカを出た祖先はいかにして世界各地へ拡がったか。遺伝子の示すその道筋とは。人類史の常識を覆す壮大な歴史が明らかに! 定価2520円

草思社 東京都渋谷区千駄ヶ谷2-33-8 ☎03(3470)6565 定価は税込

■環境にやさしく、安全な食べ物かチェックしよう！

フード・マイレージ
—あなたの食が地球を変える
中田哲也／著
◇四六判 1890円

食べものの量×運ばれてきた距離
＝フード・マイレージ。

■世界を分ける二大ワインの社会文化史

ボルドー vs. ブルゴーニュ
—せめぎあう情熱
ジャン-ロベール・ピット／著 大友 竜／訳
◇四六判 2940円

日本評論社 東京都豊島区南大塚3-12-4
http://www.nippyo.co.jp/ TEL:03-3987-8621（価格は税込）

ドゥルーズ／ガタリの現在
小泉義之、鈴木泉、檜垣立哉 編著 ●6090円

今なお使える思想家の筆頭ドゥルーズ。こうした俗流ドゥルーズ主義が跋扈する風潮を前に、哲学者としての到達点を気鋭論者超30人が精確に見据える。

シュルレアリスム、あるいは痙攣する複数性
鈴木雅雄 著 ●3570円

来るべき鬼才によるシュルレアリスム論の傑作。ブルトンを中心とする磁場の集合論として運動の全貌を描くとともに、モダニズム、前衛の問題等を思想史的に問う。

平凡社
〒112-0001 東京都文京区白山2-29-4 〔価格税込〕
TEL 03-3818-0874 http://www.heibonsha.co.jp/

日本無罪論ではない！

パール判事

◎東京裁判批判と絶対平和主義

中島岳志／著 ■1890円

東京裁判で被告人全員を無罪としたインド人裁判官パールは、「世界連邦」の樹立と日本の再軍備反対・平和憲法の死守を主張しつづけた。アジアの自主こそ真の道と説いた妥協なき生涯を描く。

白水社 東京都千代田区神田小川町 3-24
tel.03-3291-7811／fax.03-3291-8448
http://www.hakusuisha.co.jp ＊価格は税込

法政大学出版局
http://www.h-up.com/

『存在と時間』講義
統合的解釈の試み
J. グレーシュ著 ハイデガーの思考を正確に解説し，ガダマーやリクールの流れを汲む解釈学的現象学の立場から『存在と時間』とその「作業場」を浮き彫りにした，既存のハイデガー研究にはない画期的注釈書。杉村靖彦・他 訳／12,600円

第44回日本翻訳文化賞受賞

カイエ 1957-1972
シラオン著 既存の思想・神学体系と決別し，生の基本感情——悲しみ，嘆き，怒り，呪詛——の率直な表出によって歴史と文明に対峙してきた孤高の思想家の未発表ノート。シラオンが素顔を初めて見せる貴重な原典。金井裕 訳／28,350円

〒102-0073 東京都千代田区九段北 3-2-7
☎ 03（5214）5540 ／表示価格は税込です

イリヤ・カバコフ自伝 60年代-70年代、非公式の芸術
ソ連崩壊で思わぬ産物が日のめをみた。西側では識る術もない地下芸術家たちの豊穣さを語る本書だ。鴻 英良訳 三六〇円

モノからモノが生まれる
ムナーリ 料理、本から建築まで、デザインのマエストロが企画設計の考え方、方法論を指し示す。菅野有美訳 三七〇円

ラヴェル
エシュノーズ 没後70年、想像力で眼前に蘇る「ボレロ」作曲家晩年の声。まるで音楽みたいな小説。関口涼子訳 三三〇円

「民法0・1・2・3条」〈私〉が生きるルール
大村敦志 民法の基本理念とは何か? 法律の専攻でない人も面白く読める、創意に満ちた入門書。〈理想の教室〉二六〇円

みすず書房 (税込)
東京本郷5-32-21 http://www.msz.co.jp

例外状態 G・アガンベン著 上村忠男・中村勝巳訳
法秩序と生とのあいだの閾に降り立ったところからの政治への問いかけ。「ホモ・サケル」シリーズ第三弾! ■二一〇〇円

「白バラ」尋問調書 『白バラの祈り』資料集
F・ブライナースドルファー編 石田・田中訳
東西ドイツ統一により発掘されたナチ一次資料から、いまはじめて「白バラ」の肉声が明かされる——。■三三六〇円

木下順二対話集 ドラマの根源
戦後日本の思想的状況に、演劇をつうじて鋭い問題提起を続けてきた著者と各分野の専門家たちとの貴重な対話。〈対話者〉竹内実/丸山眞男/内田義彦/野間宏/尾崎宏次/下村正夫/猪野謙二/堀田善衛/江藤文夫 ■二九四〇円

堀一郎著作集 全八巻完結! ■九九五四〇円(分売可)

※表示価格は税込
未來社 〒112-0002 東京都文京区小石川3-7-2 tel 03-3814-5521 www.miraisha.co.jp

古代から近現代まで、〈女性史〉が切り拓く新しい歴史像
総項目3100余、幅広い研究の成果を集大成

日本女性史大辞典

12月発売 金子幸子・黒田弘子・菅野則子・義江明子編
特別定価26250円(期限09年1月末) 定価29400円
【創業一五〇周年記念出版】 四六倍判/【内容案内】送呈

誰でも読める **日本近世史年表** ふりがな付き
吉川弘文館編集部編 菊判/4830円 【内容案内】送呈
〈既刊〉古代史年表…5985円 中世史年表…5040円

吉川弘文館 価格税込
東京都文京区本郷7-2/電話03-3813-9151

こころ豊かな手づくりの暮らし
キラリと、おしゃれ
津端英子/津端修一著●キッチンガーデンのある暮らし 840円

生誕100年、遺された声を聴く
レイチェル・カーソン
上岡克己ほか編著 2625円

ミネルヴァ書房
〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL075-581-0296 価格税込み/宅配可

2007年12月15日発行 年3回発行 第102号
発行所 人文会 春秋社内
〒101-0021 東京都千代田区外神田2-18-6
印刷 三秀舎

〈非売品〉